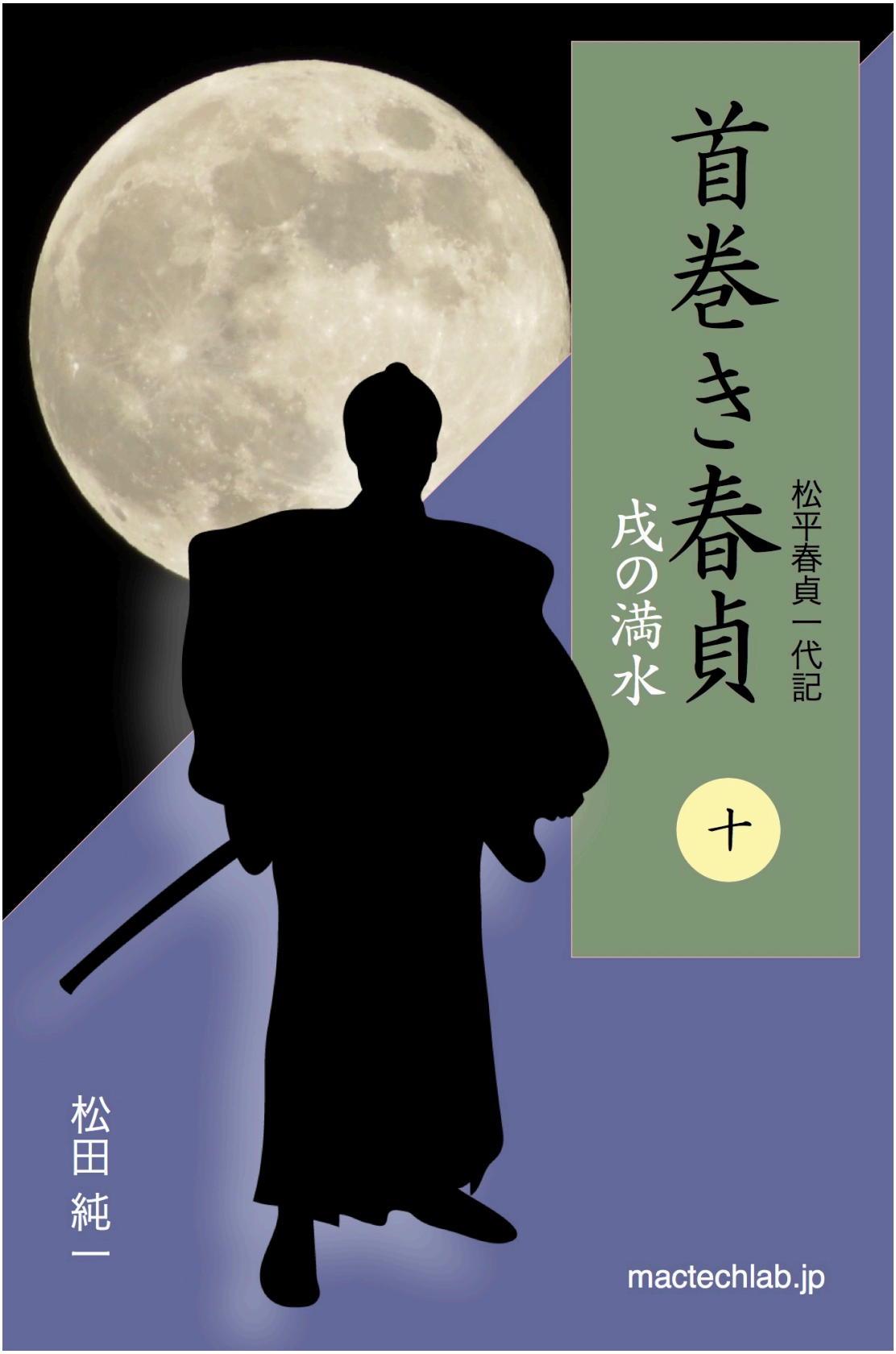
首巻き春貞
松平春貞一代記
戌の満水
十
松田純一
mactechlab.jp

首巻き春貞（十）

松平春貞一代記

戌(いぬ)の満水

表紙デザイン　junichi Matsuda

主な登場人物

・松平春貞
通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友、第七代藩主徳川宗春とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

・幸江
春貞の妻。尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。理子は春貞との間にできた娘。理子の命名は吉宗がつけた。

・沙代
春貞の乳母で育ての母。元文五年四月十二日死去

・弥生
春貞を生みすぐに亡くなったとされていた春貞の実母。友子は従者

・小川笙船
小石川養生所初代肝煎。本道(内科)の医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が

命じられたが早々と息子丹治（隆好）に肝煎を譲り隠居した。しかし春貞の屋室の奥に診療所を建てたことから医師を続けている

・小川隆好

笙船の息子。養生所二代目肝煎

・弥三郎

養生所に吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番。後に春貞の屋敷で働くようになり、春貞の軍師的存在

・佐吉

弥三郎の甥にあたる若くして優秀な御庭番

・米道格左衛門

尾張御連枝松平家時代の春貞の友。春江館館長。夏穂の夫

・夏穂

太子堂長兵衛の一人娘で剣の虫。春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦になった

・堀田万之助

尾張藩江戸藩邸剣術指南役および江戸家老永井主水の用人だったが春貞の屋敷

に加わる。田宮助左衛門の娘秋子と祝言を挙げた。春江館師範

・横手富三郎

西国を武者修行で回っていた無外流の遣い手。槍の名手でもあり格左衛門を頼り江戸へ

・留吉

春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになったが奈美と祝言を挙げた

・田宮助左衛門

御納戸同心だったが上役に裏切られて浪々の身に。妻は亡くなり娘秋子と二人暮らしだったが、縁あって春貞に仕える

・秋子

田宮助左衛門の一人娘。堀田万之助と結ばれる

・田宮（石川）奈美

木更津の代官、石川賢之介の弟仙之助の娘。父の敵を討つことが出来、春貞の屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。留吉と所帯を持つ

・およし
四歳のとき女衒に売られ吉原の遊女に。留吉の妹。春貞に身請けされ屋敷内に建てられた診療所で小川笙船の助手となる
・井之上新界
小田原の廻船問屋の息子。長崎に遊学し阿蘭陀医学を学び小川笙船の門を叩く
・静香
父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だったが春貞の屋敷で奉公することに
・伊丹鉄太郎
南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友。一刀流の遣い手。深雪は恋女房
・徳川吉宗
徳川第八代将軍
・徳川宗勝
尾張藩第八代藩主。幼名代五郎。御連枝川田久保松平家時代に米道格左衛門と共に成長し春貞を兄として慕っている

・定吉
小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち
・政五郎
室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭
・岩次郎
須田町で十手持ち兼金貸しの二足のわらじを履く
・長兵衛
日本橋元鳥越仏壇仏具商／太子堂の当主だったが隠居。夏穂の実父
・相模屋清右衛門
日本橋両替商相模屋の隠居
・三井高房
江戸一の分限者、越後屋の隠居
・山田浅右衛門吉時
公儀御試御用を勤める一方で斬首刑の執行を依頼されたことから人斬り浅右衛門、首切り浅右衛門などと呼ばれた。源蔵は息子で後の吉継

首巻き春貞（十）戌（いぬ）の満水　目次

第一章　師は御公儀御庭番　九頁

第二章　素浪人横手富三郎　三十七頁

第三章　新しい命　五十四頁

第四章　寛保の大洪水　八十三頁

第五章　さらば弥三郎　百三十頁

第六章　夫婦医者　百八十三頁

第一章　師は御公儀御庭番

一

松平春貞の実母、弥生のお披露目があった元文六年（一七四一年）一月十五日の翌月、二月二十七日に元文が寛保へと改元された。

この年は天命が改まる年（王朝が交代する革命の年）とされる辛酉（しんゆう）にあたることから、改元が行われた。

我が国において辛酉の年に改元する習わしは、政治的変革が起るのを防ぐ目的で平安時代の昌泰四年（九〇一年）の辛酉の年に元号を「延喜」と改めたことから始まったというがこれは明治になるまで続けられた。

それはそれとして、春貞の屋敷は実に賑やかであった。

何しろ夏穂と秋子の二人が懐妊したことで屋敷の日常にも些かの変化と混乱が起

きていたが、一番困ったことは夏穂が春江館での稽古をしたがり、それを夫格左衛門や小川笙船らが止めて諭すという日々が続いていた。
何しろ夏穂は春江館へ入門してから木刀を持たなかった日は一日となかったほどの剣の虫だったからで、
「いつのまにか木刀は私の腕の延長になった感があり、稽古が出来ないことは腕を捥がれたような気がしてなりませぬ」
と夏穂は愚痴ったが、
「それは分からないでもないし、それほど熱心に稽古したからこそ今の夏穂があるのだ。しかし子が出来たからには何としても母子共に健康であってくれなければ困る。
稽古の遅れは取り返しが効くだろうが、万一赤子が流産でもしたら取り返しがつかぬからな。それにそんなことになればおまえ自身の体も危なくなる」
夫格左衛門も必死だ。
実父の長兵衛や母のお糸も一時は春貞の屋敷に日参し、夏穂に大人しくしているようにと口うるさくいうものだから夏穂は些か機嫌が悪い。

しかしその夏穂も悪阻(つわり)が始まると否が応でも妊娠を自覚せざるを得なくなり、吐き気や嘔吐感だけでなく、時に全身の倦怠感や頭痛そして眠気に襲われ大人しくせざるを得なかった。

居間で愛刀を手入れしながら春貞が、

「そうだ、とっつあん。済まぬが夏穂の出稽古先、安部摂津守信平様に文を書くで事情を説明してな、詫びと共にしばらく姫様たちへの稽古は休ませて欲しいと願ってくれ」

と弥三郎に願った。

「承知いたしました。文のご用意ができましたら早速出向いてみましょうぞ」

弥三郎が応じた。

対して秋子はもともと活発な女ではなかったが、堀田万之助の意を素直に汲んで得意の裁縫に精を出していた。

とはいえ屋敷全体からみれば二人はそれまでのようには動けなくなったことで奈美と静香そして春貞と幸江の一人娘理子の役割が大きくなったし留吉への負担が増えていった。

二

静香といえば、昨年屋敷に忍び込んだのを切っ掛けにして春貞の屋敷で働くことになった彼女は夏穂と秋子の戦力穴埋めだけの役目でなく、特別な役目も仰せつかった。

それは日常の役割を果たすと共にその身軽さと跳躍力などをさらに生かし、いざとなったときには戦力となるよう武芸に励めという春貞からの命であった。

「静香。他の者には真似の出来ないお前の優れた力を弥三郎とっつあんが認めたのだから大したものだ。

だからな、日々少しずつでよい。とっつあんや佐吉から忍びの機動性をきちんと学べ」

春貞からそう言われた静香は不安顔で、

「春貞さま、わたしに女忍びになれと仰せですか」

と問うた。

「いや、勘違いするな、そうではない。

俺たちのほとんどは柳生新陰流を日々鍛錬しておるが留吉は棒術の名手になりつつある。また診療所の井之上は柔術を学んでおる。
まだ実感が湧かぬと思うが、この屋敷もいざとなれば平城として家族と仲間を守らねばならぬ。
事実これまで大勢の浪人たちに襲撃されたこともあったし火矢を射かけられ屋敷が全焼したこともあった。
さらにな、鷹狩りの上様が襲われ、この屋敷に逃げ込んだと見せかけて殲滅したこともあった」
「……」
「また幸江の出産の機会をあえて待っていたのか尾張の忍びの集団に襲撃されたこともあった。
そんな目に多々会いたくはないが、万一の場合それぞれの能力にあった働きが屋敷を守ることになると俺は考えている。
俺たちは自分を守り家族を守れると信じて日々鍛錬しているが、襲ってくる相手は一様ではない。
忍びもいるだろうし特別な武器や武芸に秀でた者たちもいるに違いないが、どの

ような相手であろうと俺たちのこの城を守らねばならぬのだ。
でな、お前のその特別な身体能力を生かし俺たちとは違う知見で相手を殲滅するすべを学んで欲しいのだ」
しばらく考え込んでいた静香は、
「しかし、そのような大役、私などに勤まりましょうか」
と問うた。
「お前の師は日の本一の公儀御庭番、弥三郎とっつあんだ。それにな、縄一本で向こうの二棟の倉に易々と飛び移れる者などそうはいないぜ。
俺や格左、万之助でもできまい」
春貞は言いながらにやりと笑うと静香は思わず赤くなって俯いた。
「過ぎたことだがついでに聞こう。
あの夜、俺たちに見つからなければお前は当然二つの倉の錠前を開け、刀剣類があれば持ち去ったに違いない。
そうだろう」
春貞は優しく問うと、
「はい」

と静香は素直に答えた。
「ならば、錠前外しの技も会得しているということではないか。
それだけで立派な女忍びぞ」
春貞は嬉しそうに声を上げ静香はますます小さくなった。
その日から毎日一刻ほどの時間を作り弥三郎、時に佐吉を師とした特殊な鍛錬が始まった。
それは春江館で竹刀を持つこともあったが、どちらかといえば竹藪を走ったり手近な道具、例えば縄や手ぬぐい、棒は勿論石ころひとつでも時には強力な武器になることへの知見と訓練だった。弥三郎は真剣だった。
「静香さん。春さんからも言われただろうが、お前さんを女忍びに仕立て上げようというのではない。
酷なようだが一人前のくノ一になるにはいくらお前さんが俊敏優秀でも子供のころから専門の厳しい訓練を受けなければなれるものではないからだ。
そしてな、くノ一の非情さを身につけろともいわん。
普段は秋子さんや奈美さん同様、武家の娘として恥ずかしくない振る舞いをして欲しい。

しかし一通りの忍びの術は伝えておきたいと思うておる。
公儀御庭番のわっしが非公式にせよ己の技を伝えておきたいと思った相手が静香さん、お前さんという女性であるのはわっし自身思いもよらなかったことだが、それだけお前さんの素質を認めたということよ。
これまた春さんの繰り返しになるやも知れんが、この屋敷の若奥さまと夏穂さんは剣の名手じゃがお前さんの機敏さを見込んでいざとなったらこの城を守れる一員になってもらいたいと願ったわけじゃ」
これまで父の敵討ちのつもりであったにせよ、幾多の大名屋敷に忍び込み、人知れず刀を盗んできた静香の身のこなしは弥三郎も感心するほどの身軽さだった。
「勿論、静香さん、お前さんに以前の盗賊に戻れというのではない。
わっしや佐吉の代わりをしろというつもりもないが、正直わっしも来年で齢七十。思ったように体は動かぬしいつお迎えが来るかもわからん。
すでに主なお役目は佐吉に任せておるが、お前さんの力を借りたいと思ったまでよ。
でな、わっしがいなくなったら佐吉と力を合わせ、春さんたちを、この屋敷を是非守り通してもらいたいのじゃ。

これは畏れ多くも公方さまが言われたお言葉じゃが『春貞に仕えるは余に仕えるものと心得よ』のとおりでな、春さんの力になることはお前さんの父上も草葉の陰で喜んでくれると思うのじゃがな」
弥三郎も正直な気持ちを吐きだした。
高揚しながら弥三郎の話しを聞いていた静香は両手を突き、
「ありがとうございます。少しでもお役に立てますよう励みますのでご教授よろしくお願いします」
と頭を下げた。

「よいか。忍び、忍びの者の主な仕事は斬り合いでは無い。そのお役目は本来情報を集める事じゃ。それも正確で豊富な情報を迅速にな。
様々な技はそうした情報を集めて持ち帰るためにある…」
「はい」
「真の忍びは姿を見せず、音も立てず、名は勿論のことじゃがその武勇を残すこともない。じゃが人知れず天地を造るかのような偉業を成し遂げようとする者ぞ」

そしてもうひとつ大切なことがあると弥三郎は説く。
「常に正心（せいしん）、仁義・忠信を守り正しい心を持つことだ。
仁義は『人の踏み行うべき道のこと』そして忠信とは申すまでもないが『忠義と真実、誠実で正直なこと』だ。
よいか。
例えば春さん、春貞様の命だとしても人の屋敷に忍び込み、情報を集めるようなことになったとき、正心がなければそれは盗賊と同じことになってしまう。
正心を持ち春貞様にお仕えすることが公方さまの意にそぐうことになるのじゃ。
このことを決して忘れてはならぬ」
一息入れて弥三郎は、
「少なくともわっしの目が黒いうちはお前さんを他家に忍び込ませて…というお役目を命じるつもりはない。それなら佐吉という天才がおるでな。
ここだけの話し、佐吉は縁戚の者だがわっしが教育したわけではない。しかしお前さんを倉の屋根の上で見た時、この者にわっしの知る限りのことを教えてみたいと思ったのだ。

ふむ、何故なのかわっし自身にもよう分からんがな。
だから静香さんが吸収してくれるのであればわっしの知る限りのこと、忍びいろは、錠前の外し方や火薬の扱い方に至るまでの技術を伝授するつもりじゃ。
後はおのれで工夫しくどいようじゃが屋敷を、春さんたちを守ってくれ」
弥三郎の口ぶりもいつもの好々爺といった感じはなく厳しい武士のそれだった。
ちなみに「忍びいろは」とは今で言う暗号である。

「わっしが忍びとして静香さん、お前さんに佐吉と共に後を託そうと思ったのはある意味わっしが耄碌したからかも知れぬし先の寿命が見えてきた焦りかも知れぬ」
静香は弥三郎を見上げた。
「なぜなら忍びには正心を持ち続けるために邪魔な物、心すべきものが三つある。
それはな、酒と色と欲じゃ。
いや、忍びでなくとも人というものはこの三つのどれか、あるいはすべてで失敗するものよ。

静香さんはまだ若いから分からぬだろうがな」
静香は俯いた。
「まあ、酒と欲はともかく本来忍びの術を極めるには女を交えてはならぬのだ。いや、まずは聞け。
我ら忍びは女という文字でさえ使うことを避け、くノ一と呼ぶ。
それだけ女という存在はわれら忍びには触れてはならぬ鬼門というべき存在なのだ。
しかしな、ここは江戸城ではないし藩の城でもない。
身分として春さんは一介の浪人者なのだ。
変に思うだろうが、その変であるその事こそ春貞さまの存在が徳川幕府にとって、いや上様の治世にとって無くてはならぬ特別なお人である証明でもある。
なにしろ春さんは上様から生殺与奪の命を受けたただ一人のお人なのだ。
その特別なお人を、この平城（ひらじろ）を守るにこれまでの因習に捕らわれていてはお役目を遂行できぬと思うに至ったのじゃ。
それに我らは好んで戦いを挑むことはない。

したがって普段は至極平穏なお屋敷よ。
だからそこに住み暮らす我らも特に目立った立ち振る舞いをするでもないし毎日をただ仲良く楽しんでおる。
それは其方にもそろそろ分かっておるじゃろう」
静香は再び頷いた。
「この特別なお役目を遂行するために静香さん、お前さんは大切なお役を仰せつかったのじゃよ。
そうそう。とはいっても己を犠牲にと考えてはならぬ。
己の命を守れずして他者の命をどうして守れる。
ひとつしかない命は大切にせい。よいな」
二人の話は屋敷内ではなく、竹藪の中で行われ、弥三郎の一語一語は笹の葉を揺らす風と共に消えて行った。

そんな動きとは別に向島診療所は今日も多忙だった。
田宮助左衛門が患者の途切れた一瞬を突き小川笙船の前に風呂敷包みを置き、
「先生、ご注文のお薬と白衣らです。
ご確認の上でお納め下さい」
と言った。
「いつも済まんな。田宮さんが素早く調達してくれるので助かっておる」
笙船が破顔し、
「およし、田宮さんが薬などを仕入れて下さった。
いつものように整理しておいてくだされ」
とおよしに願った。
「承知いたしました。
お次の方どうぞ」
およしの声で診察部屋に入ってきたのは昨年足を切断したお文という女だった。

亭主に肩を抱かれるようにしながらどこで拾ってきたのか木の枝だとわかる棒を杖にしていた。
「おう、手術後これで四度目かな。
お文さん、早速傷の具合を見せてください」
井之上が願うと女は左足の包帯を手慣れた手つきで外した。
「先生。お陰様で痛みはほとんどございません。
命を助けていただきありがとうございました」
夫婦で頭を下げた。
「礼はすでに沢山いただきました。よかったよかった。
ちょっと傷口を押してみますが、痛いところがあったら言ってください」
井之上が傷口の周りの皮膚が再生しつつある場所を丁寧に診ていった。
「うん、問題はないようですね。
この調子なら今度来たときには義足を着けてみましょうか」
「先生。その義足ってのを着けるとまた昔のように両足で歩けるのかい」
亭主が嬉しそうに聞いた。
「昔のようにというわけにはいかんだろうが、練習すれば杖を使わずに歩けるよ

うになる。
私が長崎で教えて貰った義足は足袋を被せるとな、着物姿なら外からは分からない。だから少しずつ上手く歩けるように練習することです」
井之上がいうとおよしが奥からその義足を取りだしてきた。
それは木材を切り出し、臑から足先までを模したもので切断した部位を馬革で筒状にした箇所へ押し込むようにして革紐で固定する工夫だった。
「せ、先生。凄いものだということはおらにも分かるが、高価なものでねいかい。有り難いがおら達には礼ができないですだ」
済まなそうに旦那が呟くと、担当の診療を終えた小川笙船が顔を出した。
「金のことは一切心配せんでよい。
これは井之上先生の指導でな、我らの屋敷の者が作り上げたものじゃ。
我らにとってもな、お前さんたちには悪いがよい勉強の機会なのじゃ。傷口が完全に乾き完治したら試してみようぞ」
笙船の言に井之上とおよしが頷き、夫婦は深々と頭を下げて帰って行った。
義足は弥三郎と留吉が井之上新界の描いた図面を元に端材から作ったものだった。

そのとき格左衛門が診療部屋に飛び込んで来た。
「せ、先生方。夏穂が、夏穂が大変だ。来てくださらんか」
「どうされた」
「先生。下から出血し痛みもあるようじゃ。いま若奥さまが付いていて下さっているが流産かも知れん」
「分かった。井之上さん、ここを頼む。
およし、一緒に来てくれ」
小川笙船は年寄りと思えない身軽さで診療所を飛び出し、離れへと走った。
笙船が部屋に入ると血の噎せるような臭気が異常事態を物語っていた。
「しっかりしろ夏穂。笙船先生が来て下さったぞ」
幸江に支えられていた夏穂が悲痛な表情を笙船に向けた。
「あ、あかちゃんが。先生、赤ちゃんは大丈夫でしょうか」
夏穂も初めての体験で平常心を失っていた。
「夏穂さん。おまえさんは女子とは言えひとかどの武術家、まずは落ち着きなされ。

まずはお前さんの身を守らなければこのわしが旦那に斬り殺されるわい。
すぐに元気になって剣術の稽古ができるようになる。
だから気落ちしてはならぬ」
笙船も些か支離滅裂だったが子の安否には触れなかった。
「格左衛門さん、夏穂さんの体に触れてよいか」
笙船がおよしが運んで来た手桶で手を洗いながら問うた。
ガクガクと首を縦に振る格左衛門に頷きながら笙船は夏穂の裾に両手を伸ばした。
そして、
「お子は諦めよ」
小川笙船の凜とした声が響いた。

格左衛門たちの離れの前には話しを聞いた春貞をはじめ田宮助左衛門、弥三郎、留吉をはじめ堀田万之助や奈美、静香、友子そして料理人の富四郎までが心配そうに立ち尽くしていた。
そのとき富四郎が呆然と立ち尽くしていた万之助にそっと近づき耳元で囁いた。

「堀田さま。差し出がましいことですが、堀田さまは秋子さまのことをお気遣い願います。秋子さまのご気性だと夏穂さんの流産をご自分のことのようにご心配されるに違いございません。
しかしそれでは秋子さまの体調までお悪くなってしまわれます。
夏穂さんのこと、知らせずに済むわけにはいきますまいが堀田さま、秋子さまのご心痛を和らげられるのはあなた様しかおりませんからな」
富四郎のことばを両目をかっと開いて聞いた万之助は富四郎に深々と頭を下げた。
いつの間にか春貞が横にいた。
「富四郎。気遣い恩に着る」
とその手を富四郎の肩に置くと、
「春貞さま。手前の若かりし頃に思い女が流産で命を落としましてな。
流産というやつには人並み以上に恨みがございまして、あんな辛い思いを一人でも少なくしたいと考え、余計なことを申し上げました。
お許しを」
富四郎が頭を下げて離れていった。

格左衛門の屋敷から、
「わあああっ」
と夏穂の泣き声が響いていた。

その日の夕刻、留吉が知らせに走り夏穂の実の両親、長兵衛とお糸が悲痛な表情でやって来た。
居間で春貞に会うや、
「春貞さま。まことに申し訳ないことをいたしました」
と夫婦で頭を下げた。
「何ごとだ長兵衛さんお糸さん。
俺たちへの気遣いならいらぬ。その分、夏穂を労ってやってくれ。
子供ができたら稽古ができないなどと愚痴をいってはいたが、いざ流産となれば気落ちし、格左に申し訳ないとばかり言っているそうだ。
お前さんたちの顔を見れば少しは安堵するやも知れぬ。
離れに行き、労ってやってくれ。いま格左しかおらぬでな。
それからお前さんたちのことだ、心配はしていないが叱ってくれるなよ」

春貞の言にまたまた両手を突いた長兵衛が、
「春貞さま。お子は諦めますが夏穂は大事ないのでしょうか」
と問うた。
「ああ、笙船先生いわく大丈夫だとのことだ。
しばらく安静が必要だが体より心の痛手が大きいに違えねえ。
しかし子はまた縁があれば授かろう」
と笑顔を向けた。
それからしばらくの間、夏穂は離れで安静にしているよう春貞や笙船に命じられた。
一番がっかりしているのは夏穂を別にすればやはり夫の格左衛門だったに違いないが、その気持ちを夏穂の前では出さないように気遣いしていた。
「格左衛門さま。わたしの不注意で子を失ってしまいました。
申し訳ありません」
口癖のように泣きながら呟く痩せた夏穂を格左衛門は抱きしめながら、
「もう言うな夏穂。笙船先生いわくお前の流産は特に理由あってのことではないという。

運がなかった、いや縁がなかっただけのことよ。
早く元気になって春江館で打ち合いをやろうぞ」
格左衛門が両腕に力を入れて夏穂を揺すぶると京人形のような夏穂は涙を拭きもせずコクンと頷いた。
そのとき、
「お邪魔いたしますよ」
の声がして弥生が両手で前方を探るようにしながら入ってきた。
「これは婆（ばば）さ…いや大奥さま」
格左衛門が慌てると、
「婆でようございますよ。東海道の旅のお仲間ではございませぬか」
と上がり框に腰を掛けた。
「夏穂。こうしたときほど見舞いの言葉など白々しく思えるかも知れませぬが、お体を労ってくださいね。
皆あなたのことが大好きですし心から心配しております。
格左衛門どの、女には殿方が逆立ちしても分からない辛いこともございます。

くれぐれも夏穂のことお頼みいたしましたぞ」
そう言い、ゆっくりと離れを出て行ったが、その後ろ姿に格左衛門と夏穂は深々と頭を下げた。

四

その日も竹藪の中で弥三郎が熱心に静香に忍びの秘技を教えていた。
一息入れ二人が小さな切り株を見つけて座り込んだとき静香が問うた。
「先生。質問がございますがよろしいですか」
「うむ」
「ものの本などによれば、忍びは事を成すとき胸の前などで印を結ぶと見聞きしたことがありますが、あれはどのような秘技なのでしょうか。
相手になにか呪をかける技なのでしょうか」
静香の問いに弥三郎がふっと好々爺の表情に戻った。

「確かに芝居や絵双紙などにもそうしたことが描かれたりするのう。
しかし静香さん、ここだけの話しだがあれは相手をどうこうする技ではないしあまり意味のあることではないわ。
ちなみにわしはあのような印など結んだことはないぞ」
と破顔した。
「意味がございませんか」
「いや、意味があるとすれば己のためなのだ静香さんや」
「……」
「忍びとて人間ぞ。大事を前にして心騒ぐときもあれば気後れするときもある。
ああした印は相手に呪詛をかけるのではなく己の心を落ち着かせ平常心に戻すためのものじゃ。
やはり密（密教）の影響を受けた作法だろうのう」
弥三郎が竹藪から覗く青空を振り仰ぎながら答えた。
刹那、上空からザザザッと音がして数本か、静香の頭上に竹の棒が降ってきた。
静香は落ちてきた竹の棒を避けると思いきや声も立てずその合間をぬって躱しながら飛び上がり、細い枝にぶら下がったと思ったら瞬間そのしなりを利用してふ

わりと弥三郎の背後に降り立った。
「み、見事じゃ静香」
弥三郎がそういいながら「ピィ」と指笛を吹くとどこからともなく笑顔の佐吉が降りてきた。

桜が散る時期になってやっと夏穂は心身共に落ち着いてきた。
小柄ながら剣術で鍛えた体はもともと頑強だったからかめきめきと回復したものの、やはりときにふと悲しそうな表情になる事を夫の格左衛門は心配していた。
その夏穂もある意味、これまでの人生で一番の挫折、悲しみを体験したからか人に対する思いやりが深まったように春貞や幸江には思えた。
特に一緒に妊娠とわかった一方の秋子に対してはこれまで以上に優しく接し、
「わたしの分も元気な子を産んでくださいね」
と声をかけ、身の回りの世話も怠らなかった。
その秋子の世話は主に春貞の母、弥生とお付きの友子が担当していた。
幸江も常に側にいてやりたいと願ったが、沙代が亡くなって以来、屋敷のきりもりの多くをこなさなければならない立場だったからだ。

そのような折、久しぶりに山田浅右衛門が酒を下げてやってきたが、ここのところ急に老け込んだように見えた。
「山田さま、どこかお具合でもお悪いのですか。であれば向こうの診療所で一度受診されてみてはいかがでしょうかな」
春貞も些か心配してそう言葉を掛けた。
「ありがとうござる。しかしすでに原因は分かっておりましてな。余命はもって後二年か三年と己で覚悟をしておりますが跡目を決めておるだけ気が楽でございます」
と苦笑した。
浅右衛門はどうやら胃の腑にできものがあるようで、気力と体力が衰えていることを自覚していた。
「そんなときに、酒をご一緒してよろしいのですかな」
春貞はそう言いながら浅右衛門が持参してきた上等な下り酒を盃に満たした。
「これは恐縮。まあ、これだけは別でござってな、酒を飲めない人生などないも同然でござるよ」
浅右衛門は快活に笑った。

そのとき幸江と共に静香が膳を運んで来た。
静香は浅右衛門の前に座し、丁寧に両手を突き頭を下げてから用意した膳を置いた。
「これまた恐縮…」
奥に戻っていく静香の後ろ姿を眺めながら浅右衛門は、
「初めてお目にかかるお方ですが、どなた様でございますか」
と問うた。
「静香といいますが、ちょいと因縁がありまして我が家で奉公することになりましてな」
春貞が答えると浅右衛門は、
「お若くも美しい女性には違いありませぬが、一分の隙も伺えない不思議なお方でございますな」
手元の盃を飲み干しながら言った。
「実は…」
春貞はかいつまんで静香との縁、そして屋敷で働くことになった経緯を浅右衛門に話すと驚いた顔をし、

「何とも春貞どのは懐の深いお方ですな。しかし静香どのは剣の腕とは違う気を感じさせましたので尋常なお方ではないとは思いましたが、それにしても…」
と破顔した。
「はい。剣の腕はまだまだなれど、弥三郎を師として日々励んでおりますので役に立ってくれる日も近いと期待しております。
ただしさすが山田さまとは申せ、尋常でない気づきをされた事実はまだまだ鍛錬が足りませぬな」
春貞は素直にそう言い切った。
「いやいや。しかし日本一の御庭番が師とはどのようなお人に育ちますか楽しみでございますな。
それがしも体が動く内に一度竹刀を交えてみたいお方ですな」
優れた剣客である山田浅右衛門はどこか遠くを見つめて呟いた。

一

緑が濃く感じられるようになった初夏のこと、
「ご免」
昼餉が終わり腹ごなしも兼ね、春江館で稽古を始めていた春貞たちだったが米道格左衛門、堀田万之助、夏穂らが一休みしようとしていた道場によれよれの着流しに今どき珍しい槍を小脇に抱えた武士が声を上げた。
歳の頃なら四十前か。しかしその表情は深く刻まれた皺に隠れてよくは見えなかったがもしかしたらもっと若いかも知れず小柄で丸顔だった。
丁度万之助と竹刀を交わし終えた格左衛門が玄関に出て行くと、
「それがしは横手富三郎と申す浪人者。米道格左衛門殿にお目にかかりたく罷り越したが…」

といった途端その場に片膝突き座り込んだ。
「どうされました。道場破りでございますかな」
格左衛門は男の言葉に西国なまりを感じつつ応じると、
「これは失態をお見せしてご無礼を申し上げました。
じ、実は拙者、腹が減って立てませぬ。
薪割りでも畑仕事でも何でもいたす故、恥ずかしながら飯を馳走いただけまいか」
とか細い声で願った。
格左衛門も春貞の屋敷にたどり着くまでの長い間西国を中心に道場破りの真似事を続けていたこともあってこの種の人たちには理解があった。
「それは難儀でござろうな。
では裏から居間に回ってくださらんか。すぐに飯の支度をさせますでな」
そう言いながら格左衛門は夏穂に願って見ず知らずの男のために飯を用意するように指示した。
飯と言っても急遽誂えたのは大きく山に持った白米と味噌汁、焼き魚の半身、そして香の物だけだったが横手富三郎と名乗った男は美味そうに、時に咳き込みな

がらも平らげた。
最後に茶をお代わりした横手富三郎と名乗った男は満面の笑みを浮かべ、格左衛門に両手を突いて頭を下げた。
「話しに聞いたとおりのお方でございますな。
貴殿が米道どのでございますかな」
頷いた格左衛門に向かい横手は正座し懐から一通の奉書を取りだし格左衛門の前へと差し出した。
「なんでございますかなこれは」
格左衛門が問うと、
「松谷久四郎殿からの紹介状でござる」
「な、なんと。拝見いたす」
破顔した格左衛門は文を広げた。
昨年、春貞の実母弥生の安否を確認するため、密命を受けた格左衛門たちが箱根から三島に至った際、縁があって雲助宿に世話になったが、松谷久四郎はその頭目であった。
そこには、「何かの折にこの文を持参した横手富三郎が頼った場合には恐縮なが

ら一晩の宿をお貸し願いたい」との一文があった。また「横手は自分と同じく酒好きではあるが悪い男ではない」との一文も添えてあった。

「それがし、初めての江戸だと松谷殿に話しますとな、江戸は生き馬の目を抜くと言われる所、万一困ったことがあれば向島の松平春貞様のお屋敷の春江館道場館長、米道格左衛門殿を頼れと聞かされましてござる。

実は一昨日に江戸に到着したのですが案の定といいますか、酔って不覚にも小悪党に騙され懐の路銀を失い、それから飯も食べられないありさまでして。

やむなく、恥ずかしながら貴殿を頼って伺った次第でござる。

飯をいただいたからには薪割りでも力仕事でも何でもやらせていただく。ご命じあれ」

と人なつっこい笑顔を向けた。

格左衛門はまず春貞に紹介するために母屋に向かった。

すでに居間に戻り座していた春貞は、

「ほう。松谷殿のご紹介とあらば我らにとってお客人。

ささ、こちらに」

と磊落に誘った。

そのとき門前に人馬の喧噪が聞こえ立派な乗物が止まった。
急ぎ取り次いだ静香は狼狽えながらも、
「春貞さま。尾張の徳川宗勝さまというお方がお見えでございます」
と伝えたが、静香の背後にはすでに八代尾張藩主徳川宗勝その人が笑顔で立っていた。
「兄様、ご無沙汰でございましたが参勤で江戸にまいりましたのでご挨拶に伺いました。
弥生さまにもお目通りさせてくださいませ」
と願った。
勝手知ったるといった感じで宗勝は玄関を潜りながら、
「兄様。まずは沙代さまに線香を上げさせていただけませぬか。
仏間にご案内下され」
と願った。
しばし仏壇の前で手を合わせ、瞑目していた宗勝は、
「これでやっと沙代さまにご挨拶ができ申した。

藩主といえど思い通りにならないこの身。お許し下さいませ」
と再び位牌に頭を下げた。
取り次いだ静香もそして春貞に紹介されたばかりの横手もただただ呆然としていた。

四半時の後、酒が乗った膳が運ばれ一緒に弥生と友子が姿を見せた。そして、部屋の入り口に座した弥生が平伏しようとすると、
「弥生さま。今日は兄様の悪友としてまかりこしましたのでそれがしが母様にご挨拶をいたさなければ礼を失うことになり申す。
是非こちらへお越し下され」
と上座に誘った。
弥生は躊躇したが春貞を見ると頷いているので意を決し宗勝の言うとおりに上座に座した。
宗勝は弥生の前にあらためて座し、
「代五郎改め徳川宗勝でござる。事情を知らない若造とはいえそれがしは現在まごう事なき尾張藩主。

弥生さま。それがし如きが頭を下げても事は元に戻りませぬが、永きに渡ったご無礼を深く深くお詫び申し上げます」
徳川御三家筆頭格の尾張藩主が弥生に平伏した。
「宗勝さま。お待ちくださいませ、それはいけませぬ。おつむをお上げくださいませ。
すでに昔の事。
今はおかげを持ちましてこうして息子と暮らせることになりました。こちらこそ多大なご尽力に御礼申し上げます」
弥生も上座を外して平伏した。
「さあさあ、お互い挨拶はその辺でよろしかろう。宗勝さま、母上、膳の前にお戻りください」
春貞が嬉しそうに願った。

幸江と共に配膳の手伝いをした静香は、話しには聞いていたものの眼前に尾張藩主が座し、春貞を兄様と敬っている様子を見て驚愕し得も言われぬ感動に浸っていた。

本来は客間に案内すべきところ、宗勝が進んで一同がいた居間に入り込んだため、些か狭いながらもその居間で膳を囲むことになった。
春貞はあらためて実母弥生を江戸に連れてくる際に宗勝が色々と骨を折ってくれたことに礼を述べた。
「いやはや兄様、格左から話しを聞いたときにはそれがしも驚きました。と同時に母御には四十年以上もの長い間筆舌に尽くせぬご苦労を強い、いかに弁明しても取り返しがつかぬことと思い悩みました。
気心が知れております格左の申すことでなければにわかには信じられない事態でございますからな」
隣に座った弥生から酌を受け、頭を下げながら宗勝は続けた。
「それがしが出来ることといえば、ご無事に弥生さまを江戸の兄様へお送り申し上げること。そう考えましたが、不幸中の幸いといってはお叱りを受けるかも知れませぬが、匿われていたのが熱田神社であったことは幸いでした。
そう考えますと近江屋と井筒屋の慧眼と尽力に頭が下がり申した」
盃を置いた宗勝に、
「殿。その近江屋と井筒屋はその後商売に支障がでるようなことはございません

でしょうな」
と春貞が問うた。
「無論のことです。それぞれの商家には内々なれど目通りを許し、褒美を受け取ってもらいましたぞ兄様」
「それはようございました」
春貞と宗勝は盃を合わせて破顔した。
屋敷に到着したばかり、春貞に挨拶したばかりの横手富三郎も状況もわからず座敷に同席させられ緊張を隠せずにいた。
松谷久四郎から米道格左衛門のこと、そして屋敷の主人である松平春貞のことは一応聞き及んでいたが想像を絶する展開を眼前にして体を震わせていた。
宗勝は半時余りの間一同と膳を囲んでいたが、側近の一人が襖を開けたのを合図に、
「兄様、ご一同。相変わらず野暮用が多々ございましてそれがしは失礼ながら中座いたしますがお許しを。
弥生さま。またお伺いいたします」

と言いながら座を離れた。
友子に手を引かれた弥生、春貞と幸江、そして格左衛門と夏穂が門前まで送りに出たが藩主の顔に戻った宗勝は乗物の中から会釈して離れていった。
その整然とした人馬の列に春貞たちは無言で頭を下げた。
居間に戻った春貞は横手富三郎に破顔し、
「ご無礼をいたした横手どの。まだ時刻も早いし飲み直しましょうぞ」
というと幸江も、
「横手さま。今夜はこちらに部屋をご用意しておりますので後でゆっくり湯に御浸かりになってからお休みくださいませ」
と願うと横手富三郎は恐縮し何度も頭を下げた。

二

翌朝、米道格左衛門はいつものように夏穂と共に朝餉の前に春江館へ足を向け

た。
掃除と稽古のためだが、離れの座敷を出ると何と横手富三郎が弥三郎、留吉と一緒に庭を掃除していた。
「これはこれは、おはようござる。
しかし客人にこのようなことをさせては申し訳が立ちませぬぞ」
と格左衛門がいうと横手は、
「おはようござる。いや、これほどの持てなしをいただき何もせんでは罰があたりますのでな、弥三郎どのに願って箒をお借りいたしました」
と釈明したが隣で弥三郎と留吉がにこにこしていた。
結局いつもの顔に横手を加えた者達で道場の掃除を終え、朝稽古が始まった。
「横手さん、お主はかなりの遣い手とお見受けするが何流ですかな」
格左衛門に問われた横手は、
「拙者の流儀でござるか。
一応剣は無外流，槍は念流を学びました」
と笑顔で答えた。
「ほう、無外流でしたか。聞けば実践型の剣法だといいますな。それは是非お手

合わせ願いたい」
格左衛門がいうと万之助や夏穂も同調した。
「いやいや、それがしは十五のときに月丹（辻月丹）先生の門を叩きましたが先生は当時引く手数多でございましてな。大小名家三十数家の他に直参が百五十人余り、陪臣に至っては一千人ほどの門下生がいたという時期。
到底我らのような新参者に目が行き届く状況ではございませなんだ。
それでも先生の目に止まりたいと寝る間も惜しんで稽古を続けましたが先生は享保十二年に鬼籍に入られ、ついに一度も竹刀を交えることはできませなんだ。
いま思いますとその不満が一時剣から槍へと移った理由かも知れませぬ」
一呼吸入れ、
「それからは幾多の道場の客分となり、念流、一刀流、中条流などかたっぱしからその神髄を得ようと努力いたしましたがいまだ先が見えずのありさまでして」
頭を掻きながら横手が苦笑いした。
「松谷久四郎殿から伺ったところによりますと、こちらは柳生新陰流の道場とか。せっかくのご縁、叶わぬまでも一手ご教授いただきましょうぞ」
と横手は頭を下げた。

そのとき、見所にいた春貞が、
「それではそれがしがお相手いたしましょう」
と立ち上がった。
「えっ、どこの馬の骨かも分からんそれがしに主人様がお相手いただけますか」
横手が驚くと、
「剣の稽古に主人も家来もござらん。少なくとも我が屋敷ではな」
と笑いかけた。
「横手どの。お手前は馴染んでおられるであろう槍でお相手くだされ」
春貞はそう言いながら木刀を手にした。
横手も意を決し、愛用の槍を左脇に携え道場の神棚に頭を下げた後、二人は三間ほどの間隔で向かい合った。
頭を下げた両者は「いざ」と声をかけて構えに入った。
横手は左前半身構えから穂先を少し下げつつ左前に進んだ。
しかし春貞は右手に木刀を下げたまま立っているだけだった。
「う〜む」
呼吸を整えた横手はゆったりと思える速度で間合いに入った刹那飛び下がった。

そして驚愕の体で右掌を前に突きだしながら床に正座し。
「ま、まいりました。
これは…お、驚きました。
泰平の世にいまだ鬼神とも思える剣者がおられるとは
到底拙者に勝ち目があるお方ではございません」
と武器を交えずして潔く頭を下げ負けを宣言した。
春貞は笑顔で横手の前に座して、
「横手どの。お手前の強さはしっかりとこの春貞受け止めましてござる。
その強さの秘技がどこにあるのか、一日や二日では分からないと思いますので、
宜しければしばし客分としてご逗留いただき我らと稽古をしてくださらぬか」
と願った。
両眼を大きく開けた横手はふっと肩から力を抜き、
「ありがたき仰せ。
よろしくお願いいたす」
と両手を突いた。

どこか剽軽な横手富三郎はあっと言う間に春江館の人気者となった。特に理子はしばし横手を追いかけ回し指導を仰いだ。
幸江が用意した着衣に袖を通し、風呂に入って無精髭も剃った横手は顔に表れた深い皺を別にすれば恵比寿様のようだと皆に言われて照れていた。
「しかし、こちらは女衆が皆お強いのには驚きましたな。
それにお弟子さんたちが皆女の方とは…。
それがし西国を歩き回りましたがこのような道場はひとつもございませなんだ。
若奥さまとはまだ立ち会ってはおりませんが、やはりそれがしが叶うお相手ではないことは明白。
いや、夏穂さんの突きをかわせるものかどうか、分かりませんな。
理子さまも失礼ながら十三歳ですでにそこいらの二本差し数人が向かってきても叶うまい」
と言いながら、理子の伸びのある攻めを自在に交わしながら、
「おっ、いまのは鋭かったですぞ。
そう、振り切り…相手に届かなかった場合は蹴るように距離を取りましょうぞ。
間合いを取り直すのです」

などなど的確な指摘をしていた。
一休みとなった横手に堀田万之助が問うた。
「横手どの。無外流というと最近居合の無外流などと見聞きすることがございますが本当のところはいかがなのでございましょうや」
横手は懐の手ぬぐいで首筋の汗を拭きながら、
「そのようでございますな。しかしそれがしの知る限り、居合は月丹先生の預かり知らぬもの。
高弟子の方々のどなたかが…確か、自鏡流居合を取り入れる工夫をなされたのが知られたようですな。
ただしそれがしが道場を去ってからのこと、したがいましてそれがしの剣法に居合はございませぬ」
横手は言い切った。
「なるほどそうでございましたか。世間の風聞などあてにならない見本みたいなお話しですな」
万之助が納得して頷いた。
横手は、

「まあ、月丹先生はご自分の外見など気にしないだけでなく無欲でしたし泰平の世に慣れた安直な型稽古に終始する剣を嫌っておりましたからお若いときにはなかなか認められなかったと聞きましたがな。
しかし昨今はまず人の目に触れる、目立つ事が大切と考えるお人もいたのでございましょう」
ふと春貞に向き合った横手は、
「流儀もお姿もまったく違いますが、春貞さまを前にしておりますとどこか月丹先生を思い出してございます。
とにかく桁違いの御仁でございましたからな」
と虚空を睨んだ。
無外流の開祖、辻月丹は享保十二年（一七二七年）六月二十三日、七十九歳でこの世を去っている。
横手富三郎は、道場の稽古は当然ながら庭掃除、道場の掃除はもとより畑仕事も留吉らと共に積極的にこなしていた。

一

夏も過ぎ秋を感じさせる神無月（十月）に入った十日、秋子が無事男子を出産した。
幸い母子共に元気であった。
夫である万之助の喜びようは尋常ではなかったが、同じ時期に懐妊したものの流産した夏穂に気遣い、その喜びを内に秘めていた。
しかし孫が誕生した田宮助左衛門は万之助とはまた別の喜びに浸っていた。
「助左衛門どの。夏穂やそれがしに遠慮は無用ですぞ。
目出度いことは皆で大いに祝い、喜びましょうぞ」
格左衛門はそう言いながら田宮助左衛門と万之助の両手を握って振った。
「ありがたいことでございます。

かつては娘が嫁に行くことでさえ希望が持てない日々が続きましたが、春貞さまらのおかげでこうして孫まで授かりました。
お役に立てる男子に育ちますよう目を配ります」
助左衛門が言うと隣にいた万之助が、
「父上、子は生まれたばかりでございますぞ」
と笑った。
「そうだったな。
次は奈美の番だな。孫は多いほどよい」
己に聞かせるように声に出しながら助左衛門は満面の笑みを浮かべながら母屋に向かった。
奈美は仇討ちのため、関東各地を放浪していたときに春貞の屋敷で保護され、幸い本懐を遂げることも出来たが、その際に田宮助左衛門からの提案で秋子と姉妹の契を結び助左衛門の娘として新たに生まれ変わったのだ。
そしてその後、留吉と夫婦になっていた。
居間で茶を飲んでいた春貞は上気した顔の助左衛門に、
「助左衛門、目出度い」

と笑顔を向けた。
「はっ、まことにありがとうございます」
しばし間を置いて助左衛門は、
「春貞さま、誕生した孫の名はいかがいたしましょうや」
と問うた。
「ふむ、孫の名はお主が考えるがよかろうよ」
春貞が答えると、
「それでよろしいので。
何しろこの城の主人さまは春貞さまでございますのでな」
と笑みを返した。
「なにを言うておるか。お主たち親子で良い名を決めろ。
名が決まったら皆でな、お披露目と祝いの場をもうけようぞ」
春貞は笑顔でそう言い切った。

冷たい風が吹き始めた季節ではあったが新しい命の誕生は屋敷内を暖かい思いで一杯にした。

数日後、男子の名は「道之助」と決まった。
助左衛門が考えに考えた結果であった。
「父上、堀田道之助とはよい名でございますが、謂われをお教えくださいませ」
万之助と秋子に問われて助左衛門は神妙な顔になった。
「うむ。道之助のな、之助は無論父親である万之助どのの名からとったものぞ」
「ありがたいことでございますが、それでは道という名は…」
万之助の問いに助左衛門はまだ伏している秋子に顔を向けながらおもむろに話しを続けた。
「実はな、秋子は当然承知じゃが、亡くなった我が妻の名が道子というのだ。道子が生きておればどれほど喜んでくれたかを思い、そして春貞さまのお考えになる道の一端をお守りできる男子となるようにと願ってのことなのだ」
「なるほど、義父上の御名がないのは些か寂しいですが、よい名です」
万之助が言い切った。
「それがしの自己満足は妻の名と供に込めた。それにな、助左衛門のどこをとっても可愛いこの子には似合わんて」
笑いながら助左衛門は赤子を覗き込んだ。

二

その頃、夏穂は春江館で横手富三郎と竹刀を交えていた。
流産したことは大きな心の傷となったが、それを打ち砕くべきさらなる稽古に猛進していた。
「夏穂どの。あなたの剣は伸びやかでかつ恐ろしいまでの気が籠もっておりますな」
竹刀を一端引いた横手が真顔で言った。
「己ではよく分かりませんが、迷いが吹っ切れました。これも横手さまの薫陶のおかげでございます」
素直に夏穂は横手に頭を下げた。
「なにをおっしゃる。
それがしは新参者。
春貞どの、格左衛門どのたちの恩義に多少でも恩返しをと考えているだけでございますが、それにしても夏穂どのの自在な剣さばき、それがしも防ぐのに冷や汗

をかきましたぞ」
笑顔で富三郎がいいつつ、
「もう一手、お願いしましょうぞ」
「いざっ」
道場の中央で再び火花が散った。
それを見所に座していた夫の格左衛門が隣の春貞に、
「おかげさまで夏穂も心の整理がついたようです」
と呟くと、
「よかったな格左。
それにしても横手の言うとおり、夏穂の剣は益々鋭いものになったな。
すでに商家の娘といった印象は薄れ、今や立派な武家の女房ぞ」
感慨深そうに春貞が応じた。

秋子の床上げも間近になったが、道之助と名付けられた赤子の世話は主として春貞の母弥生が友子の力を借りながら嬉々としてやっていた。
「大奥さまのお世話になるとは申し訳ない」と恐縮する秋子や万之助を尻目に弥

生は襁褓の替えも満面の笑顔で務めていた。
「わたしは特に皆様のお役に立つお務めができるわけではございません。こうしたときに少しでも役に立たなければ江戸に連れて来ていただいた甲斐もございませんよ」
が弥生の口癖だった。
しかし春貞に言わせると、
「まあ母上の生き甲斐にもなればよいことよ。
それにな、俺を生んですぐに離され、抱くことも襁褓を替えることもできなかったその無念さを遅ればせながらいま愉しんでいるのではないかな」
と苦笑していた。
ただし実際に授乳はともかく、赤子の世話をする女衆は多かったから母の秋子も安心して静養できた。
「万之助、どうだ。息子ができた感想は」
春貞に問われた堀田万之助は即座に、
「春貞さま、どうにも私の腕に道之助が回ってきません。
誰が父で母か、彼奴は分からなくなるのではございませぬか」

と心配し嘆いた。
師走の声が聞こえてきた頃、相変わらず道之助の泣き声が寒空に高く響いていた。

三

慌ただしくも寛保二年の年が明けた。
春貞は田宮助左衛門が報告のため持参した帳面をながめていたが急に話柄を変えた。
「助左衛門。話しは変わるが、さきほど横手の話が出たがお主はあの人物をどう見る」
と真顔で問うた。
「人物でございますか。
それがしが見る所、剣の腕はもとより得がたいお人柄だと思いますが、なにかお

考えがございまするか」
助左衛門が逆に問うた。
「うむ。承知のように横手はいま客分に甘んじているがすでに半年近くになる。もし本人にその気があるなら屋敷に向かい入れても良いと思ってな。
ここのところ格左衛門や万之助も大藩への出稽古が増え負担も増えておる。したがって春江館での指導までなかなか手が回らぬ状況になってきたように思う。横手が例えば師範代という立場で道場の細部に目を配ってくれれば随分と楽になると思うてな」
春貞が破顔しながら応えた。
「僭越ではありますが、よきお考えであると存じます。
事実横手どのは商家の女弟子たちにも受けがよろしいようですし…」
と助左衛門が言いよどんだ。
「どうした。なにか怪訝なことでもあるか」
春貞が顔を上げた。
「いや、これまたそれがし如きが僭越ですが、横手どのの人物は申し分ないと思います。しかし春江館での指導となりますと新陰流でなくてもよろしいのでしょ

うか。
横手さまは無外流でしたからな」
助左衛門が心配そうな顔をした。
「そうか、それを心配してくれたか。
しかしな助左衛門。我が道場は新陰流を学ぶ所だとは一言も明言しておらん。無論俺や格左衛門、幸江は新陰流だがそれはたまたまだ。
どうしても新陰流を身につけたいという奴がいれば話しは別だが、無外流であろうと俺は一向にかまわん」
春貞が笑顔を向けると助左衛門も笑みを返しつつ、
「嬉しきお話しでございます」
と応えた。
「助左衛門。そこでな、頼みがある。
おぬし、俺の意を持って横手にその旨を話してはくれぬか」
春貞が言うと助左衛門は怪訝な顔をした。
「そのような大事なお話、それがしには役不足。それに主人(あるじ)さまからのお話しで

なければまずいのではございませぬか」
「いや、決して横手を軽んじての願いではない。我が屋敷に縛っては奴の将来に影響があるに違いないし、俺が話すのは容易なことだが強制になってもいけねえし、変にこれまでの恩を感じてもらっても困る。本当の意味で横手がどう思っているのかを知りたいのだ」
春貞は腕組みをしつつ言い切った。
「なるほど、承知いたしました。それでは早速それがし、これから横手どのと真摯に話し合ってみましょうぞ」
破顔した助左衛門が頭を下げつつ即答した。

一刻もすると横手富三郎が田宮助左衛門と肩を並べて離れにやってきた。
「さあさあ、まずは上がってくれ」
春貞が磊落にいうと横手は緊張気味に春貞の前に座り頭を下げた。その横で助左衛門がにこにこしている。
「早速だが、助左衛門から話しを聞いてくれたか」
春貞が語りかけた。

刹那、横手は春貞に平伏しつつ、
「ありがたきお話し、もしそれがしでお役に立つことがあればご信頼に背かぬよう一命を掛けてご奉公させていただきたく思います」
言いつつ横手は泣いていた。
「ありがとうよ。まずは手を、顔をあげてくれ。
お主の人柄はもとより剣および槍の腕前はよく承知しているつもりだ。
是非俺たちの仲間に、家族の一員となって欲しいと思ったがお主は剣客だ。
俺たちのところに納まってはその後に名を上げることも出来ぬがそれでよいか」
春貞は優しく問いかけた。
「無論のことでございます。
長い間、剣の腕を磨きたいと西国を回り続けましたが、それがしもすでに四十の歳を過ぎました。
確かに志はございましたが、先ほど助左衛門どのからお話しをいただき目から鱗でございました…」
「ほう…」
「剣者としてひとかどの人物になりたい。そしてどこか大藩に召し抱えていただ

き…などと漠然と考えておりましたが時代は泰平の世。剣は喧嘩の役には立ち申すが飯を稼ぐ縁にはなりませぬ。
しかし助左衛門どのはそれがしに『春貞さまにお仕えするは畏れ多くも公方さまにお仕えすること。立派なお召し抱えではございますまいか』と言ってくださいました」
横手は言いながら左袖で涙を拭い、
「叶うことでしたらお役に立ちとうございます」
と平伏した。
隣にいる助左衛門も、
「春貞さま。それがしからもよろしくお願い申します」
と頭を下げた。
「おいおい、手を、頭を上げてくれ。
助左衛門に話しをするように願ったのは俺の方だ。
それでは今日ただ今から横手富三郎は客分扱いを解き、俺たちの正式な仲間とする。よいな」
春貞の呼び掛けに、

「ははっ」
横手富三郎と田宮助左衛門が再び平伏した。
「もうよい。
では助左衛門、横手の給金をな決めてやってくれ。
そしてな、当面のお役目は春江館師範代を命じる。
富三郎、万之助らとよく話し合ってな、できれば将来出稽古の一端を手伝えるよう努力してくれ。
頼んだぞ」
三人は頷きあって新たな決意を示した。
「春貞さま。早速ですがひとつお願いがございます」
富三郎が涙で濡れた目を春貞に向けた。
「うむ」
「それがしが当お屋敷にご奉公することになったこと、あの松谷久四郎殿へ文にて知らせて宜しゅうございましょうか」
「無論のことよ。
俺からもよろしくと伝えてくれ」

春貞は庭に面した障子を開けながら言った。
朝から断続的に降り出した雨は本降りになっていた。

四

雨といえば、寛保二年（一七四二年）は梅雨が明けるはずの七月になっても雨降りが続いた。
「これじゃあ梅雨明けもなく雨が続くようだなあ。
日照不足が続けば稲の生育も遅れるし疫病も心配だ。
またまた飢饉など起きなければよいがな…」
春貞も天を仰ぎながら呟いた。
確かに異常気象で夏とは言え肌寒い日も続いた。
人々の関心は飢饉に向けられたが、その大雨続きのために河川流域だけでなく山林などが多くの雨水を吸い込んでいつ崩れてもおかしくない状態にあったが気づ

いた者はいなかった。
実はこのような大雨が続けば大きな災害に繋がる要因のひとつに開墾・開発があった。
幕府は遊水機能を持つ沼地や溜井を次々と潰して新田にする。曲流河川を真っ直ぐな流れに改修し河川敷を狭め、かつその河川敷や湿地ですら農地として米の増産を図ってきた。
将軍吉宗が米公方と揶揄された所以でもある。
結果、大雨が降れば土砂崩れはもとより洪水の可能性も大きくなっていった。

七月二十日、しばらく姿を見せていなかった佐吉が春貞に面会を求めた。
「お役目ご苦労。急用か」
春貞の問いに、
「上様からのご伝言でございます」
佐吉は頭を下げながら答えた。
「なに。上様とな、なにか出来(しゅったい)したか」

春貞が真顔になった。
「春貞さまは上様が城内の築山に築かれた観測器で天文や気象の観測をなされていることはご承知でございましたな」
佐吉が問うた。
「うむ。承知しておる。
昨年義母（沙代）が亡くなった折りに線香を供えて下さった上様から直々にお聞きしたことだ」
「なるほど、それであればお話しは早い…。
その上様が申すにはこの七日か十日程後にかつてないほどの大雨の兆候があるとの仰せでございます」
将軍徳川吉宗は自ら春貞に語ったように、和歌など日本古来の文化や文学に無関心だったことから無学文盲と揶揄された。しかしその一方で医学や薬学、天文学、気象学、地質学、測量学といった実際に役立つ学問には大きな関心を示し、一部学者ほどの知識を身につけた分野もあった。
無論それらは趣味ではなかった。
例えば気象観測も地形の観測もそれは軍事に直接かかわる重要な情報であったの

だ。

事実吉宗は江戸城の風呂屋口吹上庭園に渾天儀（こんてんぎ）という大きなジャイロスコープのような観測機器と大型の遠眼鏡を製作させ自ら北斗七星などを観測し、同時に降雨量などを量るのを日課としていた。

「大雨だと…。上様御自らそう申されたのか」

些か怪訝な表情で春貞は聞き返したが佐吉は無言で頷いた。

「ふむ。大雨程度で上様がそれがしに注意を促されるとはどういうことか…」

首を傾げたとき弥三郎が居間に入ってきた。

「佐吉、ご苦労」

と言いながら春貞の隣に座した。

「春貞さま。上様は数日中に大規模な野分が襲来する恐れがあり、大水害の危険性もあるとして老中以下の幕閣の方々にも対策を講じるようにとお命じになりましてございます。

そして春貞さまにも知らせよとの命でございました」

佐吉が平伏しながら言い切った。

「わかった。上様がそう申すのであれば恐れながら戯れ言ではございますまい。とっつあん、幸江と田宮助左衛門そして留吉、それに静香をここへ呼んでくれ。善は急げだすぐにできることの対策を取ろうぞ」
春貞が命じた。
早速居間に春貞はもとよりだが、幸江、助左衛門、弥三郎、佐吉、留吉そして静香が集められた。
春貞は皆に佐吉がもたらした吉宗からの伝言を伝え、万一に備えて万全の対策をとるようにと相談を始めた。
助左衛門が、
「大規模な野分が到来となれば風水害が出ることは必定でございますな。申すまでもないことでしょうが屋敷を強風から守るため補強すること、そして一番の危惧はここは大川よりかなり高台とはいえ近うございますので水没の危険性もありうるかと思います」
というと、
「ということは雨戸を釘で止め屋根を補強し土嚢を準備し、そうですな…場合によっては井戸も使えなくなるかも知れませぬので飲み水の確保も大切」

弥三郎が明言した。
「土嚢は効果が期待できましょうが、あっしが心配なのは倉の米や芋などですな。これが水浸しになってはえらいことになります。
いかがしたらよろしいですかな」
留吉が心配顔で問うた。
「留吉さん。早い方がよい。これから皆で倉に納めてある米や芋の置き場所を底上げしておきましょうぞ」
助左衛門が提案した。
春貞は、
「よし。ご無礼ながら万一上様のご指摘が外れるようなことがあればそれは吉報と考えれば良い。
手分けをしてな、災害に備えようぞ」
と命じた。続けて、
「佐吉、済まぬがこれから長兵衛さんや三井高房さん、清右衛門さんらに文を書くで…いやそれより俺からの伝言だとして水害の危惧が迫っていることを直接知らせてくれ。無論上様のお言葉だとしてな。

それから念のためだ。山田浅右衛門殿、浅草弾左衛門殿、そうだ…吉原の四郎兵衛殿と定吉、岩次郎の所にも頼む。
最後に読売屋の浅太郎にも知らせてくれ。
野分け襲来の予測では読売は売れんがな。ただし浅太郎には上様のお言葉であることは隠しておけ」
と命じた。
「承知いたしました」
佐吉は瞬時に行動に移した。
その日の夕餉の時間、全員が一同に会した場を使い春貞は水害の可能性を示唆し対策を至急実施するように命じた。
横手富三郎は、
「力仕事であればお任せあれ」
と張り切った。
小川笙船も、
「診療所は屋敷より奥にあるとはいえ治療の道具や薬類が万一にも水の影響を受けぬよう、井之上さん、およし、明日朝から手配を頼む。

それと母屋や離れの飲み水とは別途、診療のための綺麗な水もできるだけ貯めおく必要があるな」
というと井之上は、
「長崎では多々ひどい野分が毎年のように通りました。
多少の経験はございますので先生お任せを」
胸を張って言い切った。
笙船が思い出した感で、
「そういえば、井之上さん。最近はよく阿蘭陀の本を読んでいなさるようじゃが」
と話柄を変えた。
「ほう」
春貞や弥生も感心を示した。
「いや、お恥ずかしい。
以前お話し申し上げましたが長崎に二年滞在し、阿蘭陀通事の息子と知り合ったわりには言葉を覚える時間、余裕がございませなんだ。
蘭方を蘭学をと勇んだのにこのままでは情けないと思いまして、買い求めた医

書、辞典などを寝る前に眺めておるわけです」
井之上は頭を掻きながら答えた。
「それでいかがかな、失礼ながら内容はお分かりになりますか」
田宮助左衛門が問うた。
「こちらに伺ったときよりは言葉の数をかなり覚えましたので飛び飛びでございますが理解できるようになりました。ただしその理解が正しいかどうか、確かめるすべはございませぬが。
ただし会話は目や手の動きが助けとなり何とか意思疎通できるまでになったところで長崎を離れました。
生身の異人らとの接触は続けておりませんぬとすぐに言葉は忘れてしまいますがこれまた機会がございませぬ」
と井之上は残念な顔をした。
春貞はふと思い出して口にした。
「ここだけの話しとして承知してもらいたいが、上様は阿蘭陀の文字をかなりご理解できるまでになったとご自身で申されておったな」
「ほう、それは素晴らしいことですな。

阿蘭陀通事と公方さまが多々お言葉を交わせるようになれば、世の中はもっと開かれたものとなりましょうな」
井之上が興奮して呟いた。

五

翌日から春貞の屋敷はいつもの朝稽古も休み、土嚢作り、瓦屋根や雨戸の補修と補強、そして二棟の倉に積んである米と芋などが万一水が入ったとしても濡れないように積み直した。
また井戸に泥水が入り込まないような工夫と共に飲み水のくみ置きも始めた。
全体の音頭をとっていたのは田宮助左衛門だったが、女衆と料理長の富四郎は米を別にした食材の確保と保存にも知恵を絞っていた。
秋子や奈美そして理子らも衣類が濡れないようにと準備をはじめた。
一方、向島診療所ではいつものとおりの診療を進めながら怪我人や病人が増える

であろうことを予測し、薬類は勿論、包帯などをいつもより多い目に準備していた。
そんな中、須田町の岡っ引き岩次郎が一人でやって来たが屋敷中がてんてこ舞いなことに驚き挨拶だけして帰ろうとするのを春貞が押し留めた。
「ご一同、この辺で一休みしようではないか。
おかげで随分とはかどったし須田町の親分もおいでになったからな」
その一言で一同が一息入れ、静香と奈美は台所に茶を煎れに向かった。
「旦那。佐吉さんからご伝言はいただきやしたが、これはその野分の準備でございますか。
いまも門前で諸肌脱いだ横手さまが土嚢を軽々と肩に担ぎお忙しそうでしたが」
いつもの屋敷とは様子が違う様を見ながらも岩次郎が問うた。
「おうよ。あの飢饉の例もある。準備が無駄になればそれはそれで吉と考え万一の場合をと屋敷中見ての通りてんやわんやだ。
おっ、これはすまないな、ありがとうよ。
そうだ…静香、横手が門前で土嚢を積んでいるようだが一休みするよう伝えてくれ」

春貞は破顔しながら静香が運んで来た茶に手を伸ばした。
「しかし旦那。飢饉も野分も天災には違いありませんが、我々町の衆はどうしたらよいのでしょうな。
来るか来ないか分からない野分に備えろといったところで多くの者はその日暮らしでさあ。備えようもないように思いますがな」
岩次郎が首を傾げた。
「おいおい、十手を預かる親分がそんなことでどうする。
とはいっても確かにそうだ。
しかしな親分、ひとつ忘れてはならねえことがあらあな」
春貞が伝法な口ぶりになってきたときは重要な事を話すときだと知っている岩次郎は口を挟まずにいた。
「万一、大川が氾濫し下町辺りが水浸しになったとする。
確かに食い物も飲み水もなく大変だが、それは何とかなろうよ。
幕府も黙ってはいまい。
すぐにお助け米だの救援物資を用意するだろうが、俺の心配は人の命よ」
「命ですか」

「おう。水が出て臑まで浸ったとかで済めばまだよいが、大規模の水害で河川が決壊氾濫してみろ、家が流されるだけでは済むまい。
多くの人たちが命を失うことになるだろうよ。俺はその事を心配しているんだ親分。でな、他人事ではないぜ。
もしそんなことになったら親分もまずは己の身の安全を確保してから動かなくてはなるまいよ」
春貞が忠告した。
「ありがとうございます。
しかし、あっしらが水害と聞いて思いつくのは蒲団や床を濡らさないようにするくらいしか思い当たりませんがな」
岩次郎は実感が湧かない様子で帰って行った。
その岩次郎を門前まで見送ってから戻った留吉に春貞は、
「留吉。雨が降ってきたし風が嫌に生ぬるい。
こりゃあ上様の予測が的中するかも知れねえな。
そういえば倉にある米と芋の量をな、助左衛門に確認してきてくれ。
俺は離れにいる」

と腰を上げながら命じた。
すぐに田宮助左衛門は帳面を携えて居間にやってきた。
「すまねえな、忙しいときに。
どうだ、雨が降ってきたが準備の具合は」
と問うた。
「はい。どの程度の浸水があり得るかは分かりませぬが、竹屋の渡し側からと門前側に土嚢を積み終わりました。
六尺ほどの高さですが内側に杭を打ち、補強しております。
横手どのが陣頭指揮を取ってくださいましたが、軽々と土嚢を肩に乗せて運ばれるのには驚きました。
お陰様には捗りましてございます」
「ご苦労。後はどうだ」
「お屋敷の屋根の補強は弥三郎どのと静香さんが進めておりましたがほぼ終わったようです。
しかし春貞さま。これまた今更ですが静香さんは凄いお人ですな」
助左衛門が感極まったというように声を上げた。

「ほう、なにかあったかい」
「いや、それがしは屋根に登るには梯子を使うとばかり思っておりましたが、弥三郎どのが屋根の上から縄を一本下に投げ下ろしましてな『これで登ってみなされ』と言われると、一巻き二巻きを腰に巻き付けたと思ったらするすると登ってしまいして…いやはや驚きましてございます」
助左衛門が肩をすぼめた。
「まあ、承知のように我が屋敷の倉にやすやすと登った女だからな」
にやりとしながら春貞は、
「そうだ、米と芋の積み直しは終わったと聞いたが量はどうだ」
と問うと帳面に目を落とした助左衛門はそのまま春貞の方に向けながら、
「以前の飢饉のときとほぼ同じ量の米が備蓄してございます。また芋はご覧のように量はかなり増えてますな」
と答えた。

第四章　寛保の大洪水

一

七月二十六日の午後、超大型の野分けが大坂湾に上陸した。
典型的な雨台風で、集中豪雨のため京都の鴨川や大坂の淀川などが相次いで氾濫し、京都では三条大橋が激流で崩れ落ちただけでなく堀川も氾濫し御所をはじめ町中は濁流に飲み込まれ、淀や伏見は幾多の水死体が川面を流れた。
無論、そうしたことを江戸向島の春貞たちはまだ知る由もなかったが、関八州でも七月二十七日昼過ぎになると大粒の雨となった。
そして八月一日の夜に入ると江戸向島でも最初は雨とともに北東の激しい風が吹き始め、夜四ッ時ころから激しい南風に変わり野分に見舞われた。
万全の準備をした春貞の屋敷ではあったが強い雨風が時に屋敷を叩き揺らした。
居間に揃った一同は心配そうに激しく揺れる雨戸を眺めていたが、

「こんな調子じゃ、さすがに寝る気にもなれんな」
春貞が呟くと格左衛門が、
「田宮さん、土嚢はまだ積んでいない残りがあるのですかな」
と聞いた。
「はい。確か後五十俵ほど予備としてあるはずです」
助左衛門が答えると隣の留吉も頷いている。
「であれば、後ほど積んだ場所を確認し、積み直しや積み増しなどもやりましょうか」
そう富三郎が提案したものの、
「その気持ちは有り難いが、万一のことがあると身が危険だ。明るくなるまで辛抱するしかあるまいよ」
と春貞が応じた。
「春貞。この土地は大川が氾濫しても大丈夫なのですか」
弥生が茶を飲みながら心配そうに問うた。
「母上、それは水位如何でございますな。
ご承知のように川縁からは十尺ほど高いようですし、この屋敷は新築した際に勝

五郎親方の提案で床をそれまでより高く作りました」
春貞が言うと幸江が、
「そうでございました。確か湿気を防げるということでしたね」
と応じた。
頷きながら春貞は、
「したがいまして理屈では十尺程度の浸水まではこの床が水に浸かることはないと思いますが、野分は風の勢いもございます。
土嚢が役にたってくれるとよろしいのですがな。
ただし母上、屋敷が一部雨風に壊されることがあっても流されるといったことはないと思いますな…」
と答えた。
その夜は弥生や友子、幸江や理子、妊婦の秋子そして診療所の一同は就寝することになったが、万一を考え男たちは交代で仮眠することにした。
しかし野分は衰える気配もなく明け方までも続いていた。
大型の野分けの被害を危惧していたのは春貞たちだけではなかった。

寺社奉行大岡忠相はこのままでは大水害の可能性ありと判断し、急遽江戸町奉行石河(いしこ)土佐守政朝を呼びつけ、

「江戸市中を見回って被害状況を直ちに伝えよ」

と命じていた。

しかし三日の夜になると隅田川は荒川からの激流と河口からの異常潮位にせめられ堤防はずたずたに寸断されてしまった。

大岡は続けて勝手方老中、松平乗邑に面会を求め、江戸市中の出水状況を石河に命じて把握に努めていると伝えた。

忠相はすでに齢六十を過ぎていたが、江戸の町を知り尽くしていただけに大災害を憂慮していた。

話しは春貞の屋敷…。

八月二日の明け方七つどき、弥三郎が濡れた体を拭きながら春貞のところに報告しにやってきた。

「とっつあん、無理しないでくれよ」

春貞がいうと、
「老体でも御庭番。ご案じくださいますな」
と弥三郎は笑いながら座り込んだ。
「春さん、これはちょいといけませんな。
この調子ですと江戸の町も思ったより被害甚大になりそうですな。
我が屋敷の土嚢が功を奏しておりますのでいまだ水は入ってきておりませんが、
臨戦態勢を取ったほうが宜しいかと思います」
弥三郎が眉をひそめながらさらに、
「これから六つ時に満潮となりますから下町は確実に水没しますぞ」
と肩を落とした。
事実、強い雨風が江戸湾からの高潮を隅田川・荒川などに呼び込み、その結果、
明け方七ッ時頃から水位が上昇し始めた。そして弥三郎が危惧したように満潮と
重なった六ッ時には場所によっては平常水位よりも八尺から九尺も上昇して江戸
の下町を汐水が襲った。
しかし、この時の水の勢いはそんなに激しくなく、五ッ時には潮が引き始めると
ともに水位が下降していった。

とはいえ、結果としてこのことが江戸の人たちに油断をもたらしたと言える。
すでにかなりの被害が出ていたが、これで終息するだろうと考えた人たちがほとんどだったからだ。
明るくなり心持ち雨風が弱くなったと感じられたとき、それまで姿を見せなかった佐吉が戻ってきた。
「ご苦労。なにか心配事があるか」
春貞が問うと、
「はい。ご覧のように水が引き始めているのは確かですが是非このまま警戒を続けてくださいまし。
これだけの大雨ですから低地の江戸の町にこれから水難が襲ってくるものと思われます。
事実仲間からのつなぎに寄りますと上流域では大変なことになっているようで…
関八州のほとんどの城が崩れ始めております。
途中寺社奉行の大岡様にもあっしが見聞きした状況をお知らせ申し上げに伺いましたが春貞さまにくれぐれも宜しく、そして被害がないように祈っているとの伝

言でございました」
佐吉はさすがに疲れた表情を見せながら訴えた。
「わかった。
ご一同、これからが野分の本番だと思って気を引き締めようぞ。そして佐吉、少し休め」
春貞が声を上げた。
新たに仲間に加わった横手富三郎も西国で多々大きな野分に祟られた経験から、
「一度収まったと安堵してはなりませんぞ、野分も一時的に切れるときがありますのでな。
油断するとその後にまたぶり返すという例が多々ありますから注意をしましょうぞ」
と一同を見回した。
そのとき奥から富四郎と共に奈美と静香が膳を運んで来た。
「おはようございます。
こんなときですので握り飯程度のことしかできませなんだがまずはお食事となさってください」

「おう、ありがとうよ。まずは腹ごしらえをしようぞ」
春貞の一言で居間には次々家族が集まってきた。

春貞たちは対岸の様子を確認するまでには至らなかったが、この頃、利根川や荒川あるいは多摩川の上流域で発生した大洪水の水が下流となる江戸方面に流れ始めたのだった。
さらに追い打ちを掛けるように八日過ぎになると次の大型台風が東日本を再び襲っただけでなく加えて高潮が巨大な山のようになって江戸湾に押し寄せた。
特に堤防が破壊された利根川の水流は関宿城を押し流した後に江戸下町方向に向かい、三日の夜に水が引き始めて安堵していた江戸下町を直撃し大江戸は濁流に水没した。
水位の上昇はその後も続き、後から分かったことだがこの間に本所・浅草・下谷一帯だけでも九百名以上の溺死者が出た。

「旦那、佐吉さんが申す通り水位が上がってますぜ。このまま続いたらこの屋敷も水浸となってしまいそうですぜ」

びしょ濡れになりながら土嚢の様子を見てきた留吉がそう報告した。
「土嚢は持ちこたえているか」
春貞の問いに、
「今のところは大丈夫なようですが、一部で土嚢の高さの八割ほどまで水が来ている箇所もあります」
恐ろしそうに留吉が呟いた。
「そうか、俺たちは皆の協力でこうした自衛策を取っているが、大川の対岸は大変だろうな。
長兵衛さんや、そうそう…政五郎や岩次郎らは大丈夫かな」
春貞がそういうと、
「事前に知らせて置きましたからそれなりに覚悟はできておりましょうが、どの程度の被害かわかりませんとな」
弥三郎と佐吉が顔を見合わせた。
「まあまあ、いまは俺たちの城の被害を最小限にすべく努力するときなんだろうな」
春貞は自分に言い聞かせるように呟いた。

二

その頃、本所では街中での水位が五尺（一五一センチ）、多い場所では七尺に達し、軒まで水没した家屋が続出していた。
また、両国橋・新大橋・永代橋など多くの橋が押し流されてもいた。
そして再度の暴風雨が江戸を襲ったために水位がさらに上昇し、浅草・下谷では遂に一丈（一八二センチ）にも達したばかりか、水が引くまでに更なる日数を要した。

春貞の屋敷も一時は土豪を越えて泥水が押し寄せ母屋と離れ、そして春江館あたりまでは一尺ほどの水が押し寄せていた。
とはいえ水が引くまで春貞たちも動きようがなかった。
屋敷周りの被害と言えば辺り一面泥水に浸かったこと、畑の一部が水に押し流されたこと程度で済んだのはやはり事前の準備が功を奏したからだった。
結局吉宗の予測、危惧は当たってしまったわけで利根川、荒川、千曲川、犀川な

どの主要河川が軒並み氾濫し、関東平野の相当部分が水没したことで溺死者は二万人ともいわれる大惨事となってしまった。

この寛保水害は江戸時代を通じて最悪の大水害となったが、旧暦で壬戌（みずのえいぬ）にあたることから後年「戌の満水」と呼ばれることになった。

無論こうした事態を憂慮した幕府は船をかき集め、川と街路の区別が付かなくなった下町へと派遣して、流されている人や屋根や樹木の上で震える人々を救出し、更に被災者に粥や飯を支給した。

記録によれば、食料の支給を受けた人数は八月六日で六千人、被害のピークであった八日には一万人分にも至った。

さらに吉宗は、直ちに浅草にあった幕府の米蔵を開放し被災地に送った。

その際に威力を発揮したのが鯨舟であったという。

少し後のことになるが幕府も被害の少なかった西国諸藩十藩に命じて利根川・荒川などの堤防や用水路の復旧に当たらせて事態の収拾を図ろうとした。

しかしこの「手伝い普請」は真冬にかかる突貫工事であり、各藩とも巨額の出費

を強いられただけでなく、現場では飢えと寒さのため人夫や一時雇いの逃亡や暴動なども起きていた。
そうした騒動・混乱を憂慮した大岡忠相は現地調査および復興のための予算を把握し暴動などの兆候をいち早く把握しなければならないと植村佐平次政勝ら四人を派遣したが、彼らは御庭番であったし実は別途佐吉も動いていた。
無論これらは将軍吉宗の命でもあった。

話しが先に進みすぎたが、水が引き始めた頃、診療所に長い列が出来た。
溺れた子供、流された流木などで怪我をした者や長屋や家財を失い不衛生な生活を強いられ、腹を下し体調を壊した者たちが目白押しとなった。
小川笙船らはこうした自体を予測していたものの、現実はより多くの患者が押しかけ、待合部屋には到底入りきれずに地べたに座り込む者も多かった。

患者たちにしてももっと早く診察を受けたかったものの、大川の水が引かないことには診療所までたどり着けないありさまだった。

「笙船先生。順番は順番としても乳幼児たちが緊急度が高いように思われます。異例のことではございますが子供たちから優先して治療してはいかがでしょうか」

あまりの悲惨な様子におよしが訴えた。

「そうじゃな、もし大人でも急患がいれば考えるが、およしの言うように子供たちを先に診ようかのう…井之上先生」

笙船が井之上新界と話し合い、およしが緊急度を見立てて治療の順番を付けることにした。

「さあ、おかみさん。お子さんの手を出してください。墨で順番を書き入れますので」

矢立てを持ったおよしが列に並んでいる子供たちの手に番号を書き入れていったが、すでに並んでいる者達は文句をいう者など一人もいなかった。

「おお、名はお勝ちゃんか。水に濡れていた時間が長かったのかな。風邪を引き肺炎になりそうな様子じゃな」

笙船がまだ一歳になったばかりの裾が濡れた着物を着た女子を診察しながらいうと連れてきた母親が、
「着替えもなにも流されてしまいまして」
「そうかそうか。しかしな、命あっての物種じゃ。無事でよかったのう」
笙船はおよしの手を借り、体を拭いた後に子供用の浴衣を着せた。
「薬を出しておくので朝と夜に飲ませなされ。
もし食い物がないのならそこにある芋をな、帰りに持ち帰りなされ。
そしてなこの袷は返さんでよい。このままな、なんとか寝かすように工夫しておくれ。不要になったらお前さんが使うとよい」
優しい声をかけると若い母親が涙ぐみながら両手を合わせて笙船にお辞儀をした。
浴衣は笙船の命で田宮助左衛門が野分けの前に大量に買い込んでおいたのだ。
隣では井之上新界が四、五歳ほどの男の子の右腕と右足の怪我を治療していた。
「大丈夫、大丈夫。すぐによくなるからな。
おっとうの言うことをちゃんと聞いてな、いい子でいるんだぞ」
と言いながら傷口の消毒と湿布型の薬を貼っていた。

「お次の七番の方、どうぞ」
およしの通る声が向島の曇り空に響いた。

そういえば、事前に春貞から野分の情報が寄せられていた商人や町人たちは予防策を取ったために比較的被害が少なかったからと中には独自に炊出しを始めていた御店もあった。
例えば駿河町の越後屋は三井高房が中心となり「越後屋」の幟を立てた船を仕立てて五千人分の食糧を配った。
さらに室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭政五郎や須田町の岡っ引き岩次郎、小石川水道町の岡っ引き定吉などが飢饉のときの要領で炊き出しをはじめていたが、その主とする米や芋は春貞の屋敷裏の倉から提供されたものだった。

向島診療所もやっと患者の波が引いた夕刻七つ頃、戸板に横になった岩次郎が子分六人に担がれ屋敷にやってきた。
「至急丹那にお目通りを」
そう言った岩次郎は戸板に突っ伏した。
早速岩次郎は開き門まで出た留吉と奈美に両腕を抱えられるようにして春貞のいる居間へと通された。
「どうした親分」
頭に包帯を巻き、晴れ上がった瞼は紫色に変色し口内は殴られたのか出血の痕があった。また片足には幾多の打撲と切り傷があった。
「留吉、笙船先生か井上先生を呼んでくれ」
春貞が命じ、なんとか岩次郎が柱に寄りかかれるようにして座すと、
「旦那、あっしのことは後で結構です。命に別状はございますまい。
あと半時か一時後に浪人者たちが大勢このお屋敷を襲いにきやす。

それを知らせに急いでまいりました。
遅れを取りませぬようご準備を」
岩次郎はそれだけいうと肩から力が抜けたか、畳にへたり込んだ。
居間には弥三郎がいたがすぐに姿が消えた。
「分かった。ありがとうよ。
俺たちは大丈夫だが、どうしたいその様は。
手短に話してくれ」
春貞が願うと岩次郎は再び語り出した。
それによると水害の後、水が引いたものの食料不足は如何ともしがたく町中にも盗賊が多々出没し始めたという。
中には見廻りの役人に化けて盗みを働く者もいたし、次第に破れかぶれとなったのだろう力尽くで金品や僅かな食べ物を強奪する輩も出て来たという。
岩次郎は以前の飢饉のときを教訓とし、水が引き始めると春貞の応援を元にした炊き出しを始めていたが、先ほど人相の悪い浪人者が数人で姿を見せたという。
「最初は大人しく女房や子分たちが差し出した雑炊を食していたんですが、食べ終わると『これらの米や芋はお前のところの物か』と聞くもんですからあっしは

『そうだ』といったんです」
その途端順番を待っていた浪人者と合わせて三十人ほどがあっしの家になだれ込みやがったんで」
「なんと…」
春貞から支給された米と芋もあっと言う間に無くなり、土間の端には僅かの米などが置いてあったがそれらをも略奪しただけでなく、
「どうやらどこかであっしが炊き出ししている米などは春貞さまから受けたものだということを耳にしたらしく、『春貞という奴の屋敷はどこか』と胸ぐらを掴んで聞いたと思いなせえ。
あっしが十手者と知ると普段の鬱憤を晴らすかのように殴られまして」
岩次郎は肩で大きく息をした。
「……」
ともかく浪人達に春貞の屋敷を言えば、集団で襲いに向かう勢いと察した岩次郎は、施しを受けただけで知らぬ存ぜぬで押し通す覚悟だったが、殴る蹴るの暴行を受けたという。
無論子分たち二十人ほどが手向かったが六人が浅手を負ったところ、見るに見か

ねた岩次郎の女房梅が向島だと白状してしまったという。
「で、奴らはより仲間を集めてお屋敷を襲い、食料を略奪しようという勢いでして。
奴らが散っていった隙を見て逃げだし、こうしてお知らせに上がりました次第で…。
旦那、女房を…お梅をお許しくださいまし」
腫れた顔で岩次郎が頭を下げた。
「何を言うか親分。お前さん方は被害者だ。そしてな、よく知らせてくれた。お梅さんは無事なんだろうな」
「へい。お陰様で。近隣の長屋に匿ってもらってます」
「おう、井之上先生。忙しいところ済まんがお聞きの通りだ。もしかしたらそろそろ襲撃があるかも知れねえが親分の治療を頼むぜ」
春貞が井之上新界と頷きあった。
「幸江、母上を頼む」
春貞が愛用の刀を肩に乗せて願った。

時は暮六つ近くになってあたりは薄暗くなってきたが、事を知り春貞の居る母屋の縁側付近には米道格左衛門をはじめ堀田万之助、横手富三郎、夏穂、留吉そして理子までもが集まってきた。

留吉が、

「旦那。弥三郎さまらはこの屋根の上で敵を迎えるそうです」

と伝えると、

「ほう、我が城の忍（しび）組はすでに迎え撃つ準備ができたか。

では俺たちがいなくてもよいかも知れんな」

と笑った。

どうやらすでに門前には大人数の人影が行き来し始めたようだ。

「夏穂、本身の戦いは久しぶりだが気を付けろよ。そしてな、理子さまを頼むぞ」

格左衛門が声をかけると、

「承知しました。私自身はすでに感は戻っておりますのでご心配はいりません」

と小袖の襷を直しながら答えた。

その横で槍を小脇に抱えた横手富三郎は緊張するのか両肩を上下させながら、
「何だかよく分かりませぬが、久しぶりに腕が鳴りますな」
と格左衛門を見上げた。
「横手さん、なるべく命は取らぬようにしましょうぞ。しかし、この屋敷を襲うとは身の程も知らぬ奴らよのう」
「まったく、まったく。調べもせずに押し込むとは兵法のへの字も知らぬ馬鹿者ですな」
横手が頷いた。
そのとき、
「うおぉぉぉ」
怒号と同時に抜刀した男たちが表門と春江館道場に通じる小径になだれ込んできた。
「よいか、まずは手向かう者は斬り捨て、あの二つの倉を目指せ」
頭目らしい男の太い声が響いた。
襲撃者たちは五十人ほどで襲えば藩邸ではない屋敷などひとたまりもないと踏んだようだ。

男らはもともと食い詰め浪人たちであったが、今回の水害で何とか命拾いしたものの状況は日々悪化し、その日の食い物に困窮する事態となり破れかぶれとなっていた。
岩次郎が報告したように、炊き出し時に岩次郎や子分たちが「これらは春貞の旦那から頂戴したものだ」という一言を耳にして、それほどの量がある倉を襲えば暫くは凌げると考えたらしい。
しかし言うまでもなく春貞の屋敷はそこいらの平城とは比べものにならない凄腕の剣者達がいることを襲撃者たちは知らなかった。

そういえば、春江館へ至る小径には昔夏穂が発案した工夫を弥三郎が実用化した秘策が生きていた。
それは丈夫な細紐を母屋側の柵と反対側の竹藪の間に渡し、普段は地面に隠しているもののいざという場合は竹のしなりを利用して数本の紐が一尺程度の高さにピンと張る工夫だった。
小径側を駆けてきた者たちのほとんどはこれに気づかず勢いも余ってもんどり打ち頭から倒れる者が続出し中には手にした己の刀で自身を傷つける者もいた。

「うわぁ」
「ぎゃああ」
悲鳴が続いたが、それは転倒した者たちを理子が木刀で打ち据え、辛うじて立ち上がって進んできた者たちは待ち構えていた夏穂により悶絶させられていた。
しかしその賊たちはまだよい方だったと言えるかも知れない。
なぜなら母屋を狙い、開き門からなだれ込んだ二十数人は音もなく飛んできた物体に肩や首を切り裂かれ玄関口に届く前に戦闘意欲を削がれていたし、中には首に突き刺さったため絶命した者もいた。
それは弥三郎と静香が工夫し試作していた小型の弓に矢の代わりにと竹林に豊富にある竹材を刃物のように削って作った飛び道具だった。
一番の特徴は矢に相当する竹製の刃物を三つまで同時にあるいはタイミングを任意に発射できることだった。
試作中のことだが…、
「弥三郎さま。このような発想はどこから思いつかれるのですか」
静香が不思議がった。

「静香さんや、特にわっし独自のことなどひとつもありゃあしません。弓も弩（ど）も古くから使われていた武器ですからな」

弥三郎が笑いながら答えたが、静香は、

「しかし三つの矢…これはまるで小柄か手裏剣みたいですが…を一緒に発射できるものなど聞いたことがございませんが」

と突っ込んだが、

「お天道様の下に新しき物などそうそうないものよ。

三国志に登場する有名な軍師、諸葛孔明（しょかつこうめい）というお方がいる…。

うむ、我が国がまだ神話の時代、確か成務天皇様治世の話しじゃからな、知らなくてもよいが、その諸葛孔明も連続して発射できる元戎（げんじゅう）と名付けたまあ弩（ど）をな、工夫されたそうだ」

小刀で器用に竹を割り、削りながら弥三郎が答えた。

弥三郎は静香が武器として使える物はなにか…を思いあぐねていた。

剣はこれから春江館で修行する過程で強くはなろうがまだまだだった。とはいえ手裏剣を教えるにも限度があった。

投げ針も教えたが、こうした大勢の敵には向かなかったから持ち運びも簡単な小型の弓をと考えた。
和弓は扱いが難いし、威力や命中率も射手に依存するためこれまた長時間の訓練が必要だった。
しかし弥三郎が大陸の弩を参考に作った武器は威力こそ大きくなかったが、少しの訓練で誰でも使え、近距離では命中率も高かった。

母屋の屋根の上に弥三郎と静香がこの飛び道具をいくつか設置したのだが、竹製とはいえ鋭く削った刃先は顔や首、肌が露出している場所なら匕首のような切れ味を見せたし、初速が早く近距離ならば着衣を通して刃先が皮膚を突き刺し切り裂いた。
その屋根の上からの飛び道具を辛うじてくぐり抜けた賊たちが見たものは整然と剣を構えた三人の男たちだった。無論男とは春貞と米道格左衛門、堀田万之助である。
一方春江館へ続く小径では激しい戦いが続いていた。
夏穂が徳川宗勝から授かった五条国永作と伝えられる名刀を手にしていたしその

蔭とは言え理子が十三歳になって初めて真剣で戦っていた。
二人の前には横手富三郎が槍を自在に振り回し、その隣では留吉が負けずと愛用の赤樫の棒で応戦していた。
しかし春貞たちにも弱点があった。
診療所側からの攻撃は予測していなかったものの数人の賊が竹藪を突っ切り春江館の裏を通ったところでたまたま診療所があることを知った。
襲撃を知ったとき、岩次郎はもとより待合部屋にいた五人の患者は奥の居間に匿われたが、施設や道具を守りたいと小川笙船、井之上新界そしておよしの三人は診療所に残っていた。
その診療所の玄関には薄紫色の小紋の小袖に襷掛けした幸江が木刀を下げて立っていたが診療所には武器を持った者は女一人だけと見て、十人ほどが抜き身を下げて近づいて来た。
母屋の前では万之助と格左衛門がそれぞれ一人ずつと相対していた。
ほとんどの賊は地に倒れただけに向かってきた無傷の男二人はそれだけ腕が立つように思えた。

「まだやるか」
格左衛門が刀を片手に提げたままで問うと、にやりと笑った相手は、
「俺たちにも多少の意地があるのでな」
と低い声で答えた。
「その意地が命を落とすことになる。この辺で逃げた方が得策ぞ」
格左衛門の声が響き終わる刹那、男が間合いを詰めながら抜刀した。
「ガキーン」
夕闇に火花が散り、刃と刃が軋む音がしたとき、
「うっ」
呻きながら驚愕の表情の男が血を吐きながら崩れ落ちた。
格左衛門は右手で打ち込んできた刀を受けつつ、なんと左手で相手の脇差しを引き抜きそれを腹に突き刺していた。
それを横目で見たもう一人は破れかぶれか大上段に万之助に斬りかかったが、両手で握った刀を振り下ろす前にその上半身は抜かれ、腰から離れていた。
春江館に至る小径でもほとんど勝負は見えていた。

留吉や理子が手を出すまでもなく、横手富三郎の槍技は凄まじく、夏穂も感嘆の声を上げたほどだった。
同時に三人四人と向かってくる相手を躱すでもなく、突き、はらい、切り裂き、そして打ち倒す。
その動きは長い間棒術を学んだ留吉にも見えないほどだった。
何とか横手の脇をかいくぐった数人は待ち構えていた夏穂に難なく打ち倒され、立っている者はいなかった。
「これで終わりかのう」
横手は汗も拭わずに破顔したが、診療所の方から幸江の気合いが聞こえ振り向き駆けだした。

診療所になだれ込もうとする賊六人をあっと言う間になぎ倒した幸江だったが、ひとりが引き戸に手を掛けた瞬間、井之上新界に柔術の決め技をかけられ利き腕を折られた。
このとき、診療部屋に匿われていた男の子が騒ぎが収まったと思ったか、母親の制止を振り切って表に出てきた。

それを見た賊の一人が人質にと御しやすい子供に刃を向けた。
「小僧、こっちへこい」
恐怖で硬直した子供を小脇に抱えたとき、およしが、
「子供になにをするの。卑怯者」
と叫びながら賊に体当たりした。
よろめきながらも賊が払った刃先がおよしの右半身を切り裂いた。
「ああ」
悲鳴ともうめきとも取れる声を上げておよしが血しぶきと共に倒れ込んだ。
「およしっ」
井之上が絶叫と共に飛び出した瞬間、飛んできた槍が賊の体を通貫し賊は声も泣く崩れ落ちた。
駆けつけた富三郎が投げた槍だったが、
「遅かったか…」
と井之上と共におよしの体を支えながら項垂れた。
また、佐吉も松の枝から飛び降り、
「すまねえ、気づくのが一瞬遅れてしまった」

と肩を落とした。
「およしさん。しっかりしろ。
横手さま、一緒に診察部屋へお運び願います」
井之上の願いで富三郎もおよしを抱え上げた。
井之上は、診察部屋で呆然としていた笙船に、
「先生、手術の用意をお願いします。およしさんがっ」
と叫んだ。

五

「い、井之上先生…わたし、死ぬのでしょうか」
新界の腕の中、もうろうとした意識の中でおよしが呻いた。
「死ぬもんか。絶対に私が死なせぬ…死なせるものか。
だから気を確かに持ってくれおよしさん」

井之上新界が叫びながら診察台におよしを寝かせた。
小川笙船は無言だったがやらなければならないことは言葉に出さなくても承知していた。
「若奥さま、横手さま、これから手術を始めますので侵入者を頼みますぞ」
笙船の声に幸江も富三郎も力なく頷くしかなかった。
「お、およしっ」
兄の留吉が狂ったように駆け寄りおよしにしがみつこうとしたが春貞と弥三郎に止められた。
春貞は、
「不覚だった。俺が責めを負わなくてはならねえ」
と呟くと弥三郎も、
「わっしも診療所側は無事だと思い込んでおりました。申し訳ありません」
と肩を落とした。

「およし、眼を瞑るんではない。ほれ、痛みを和らげる薬湯を飲むんだ」
笙船が命じるとうっすらと眼を開けたおよしは、

「先生、あのお子に大事ありませなんだか」
とか細い声を出した。
「ああ大事ない。だから今はお前さん自身のことをな、考えておくれ。辛いことじゃが、患者の気持ちをより推し量るよい機会だと思うてな」
笙船もおよしを励まそうと必死だった。
「それでは井之上さんや、始めようぞ。
ご一同、およしさんの小袖を脱がすでな、済まんが退出してくれ」
心配し集まってきた留吉は勿論、春貞や幸江、富三郎、秋子や奈美たちを診療部屋から退出させた笙船と新界は一呼吸し傷口の消毒および本格的な血止めと縫合手術を始めた。
留吉は春貞の命で南町奉行所に知らせに向かった。
一連の事件を報告し、死体処理や命のある者を捕縛してもらうためだ。
「春貞どの。さきほど人数を数えてみましたが怪我人および死体の数は五十二人でしたぞ」
横手富三郎が槍を手入れしながら報告した。
「お主がいてくれて助かった。しかしこのような大人数の物取りなど前代未聞。

こんな打ち壊しみてえな強奪が大川の向こうでも多くなっているのかも知れねえな」
春貞は診療所に視線を向け、心配そうに言った。
「およしさんとやらは大丈夫でございましょうかな」
横手も気になるようで話柄を変えた。
「残念だが深手のようだ。
しかしここには天下一の名医が二人もおいでになる。
何とかおよしの命をつないでくれるとよいがな」
薄い雲の切れ間から覗いた下弦の月を仰ぎ見ながら春貞が呟いた。

留吉が南町奉行所へと向かってから一刻ほど経って伊丹鉄太郎を始めとする捕り方たちが大勢やってきた。
「春さん、遅くなって済まぬ」
鉄太郎が開口一番頭を下げた。
「よしてくれ伊丹さん、まだまだ洪水の後始末が終わっちゃあいねえことぐらいここにいても分かっているさ。

てんてこ舞いなんだろうな」
春貞が伊丹を労った。
それには答えず伊丹は、
「この大人数で押し込みかい」
と呆れたように呟いた。
「道々、留吉から経緯は聞いたが、あの岩次郎が知らせたんだとすればお手柄よなあ」
鉄太郎が言い切った。
「ああ。奴も殴る蹴るの暴行を加えられ傷が思ったより広範囲でな、向こうの診療所で治療を受けていたところこの騒ぎよ。
余計な事だが、後で声をかけてやってくれ」
春貞が破顔した。
捕り方達が手際よく息のある者を縛りつつ連れ去るのを横目で見ながら、
「最近この手の浪人というか、不貞の輩が急に増えやがった。
二本差しと威張ったところでお役につける者はほんの一握り、こんなことが続けば武士の時代も早々に終焉を迎えそうではないか。

なあ春さん」
伊丹が十手を持ちながら腕組みしため息をついた。
「そうよなあ。
さぞや上様も頭の痛いことであろうと同情を禁じ得ないぜ。
御政道の工夫もまだまだ必要だろうが、こう飢饉だ水害だと続くとなあ、人心も荒廃するよなあ」
天を仰ぎながら春貞が応じた。
ふと伊丹が思いだしたように、
「斬られたおよしさんの具合はいかがなのだ」
と問うた。
「ああ、予断を許さない状況らしい。
子供を庇うために賊に体当たりをした際、袈裟に右肩から斬られたようでな、俺の油断よ。
診療所まで多人数で襲ってくるとはな…」
春貞が悲痛な物言いをすると、
「いや、春さんの責任ではないぜ。

女子供にまで無差別に刃を向ける野郎たちが何よりも憎い。
小川先生たちも懸命に治療されているに違いねえ。
お任せするしかねえな」
伊丹は春貞と無言で頷きあった。
そのとき、体を揺らしながら診療所を出てきた岩次郎が伊丹の姿を認めよろめきながらも頭を下げた。
「岩次郎、お手柄だったな」
南町奉行所常廻り同心に労いの言葉をかけられ、傷だらけの岩次郎が涙ぐんだ。
「親分。先ほど笙船先生から聞いたが、傷や打撲の範囲が広いという。
今夜は無理をせず、この屋敷に泊まれ」
春貞に言われた岩次郎は両肩を子分に抱えられながら頭を下げた。

診療所では井之上新界によるおよしへの治療が懸命に続いていた。
傷が深手だったこともあって発熱もあり、井之上が甲斐甲斐しくおよしの額に乗せた濡れ手ぬぐいを替えていた。
「おお、気がつかれたか。

痛み止めをまた処方しますので飲んでください。
出血は止まっていますが体をご自分で動かすと危険です。私が側に付いていますからこれを飲んでまた安心してお眠りなさい」
井之上が包帯だらけの上半身を支えながら薬湯をおよしの口元に運んだ。
「せ、先生。私にかまっていると他の患者さんを診られませぬ。
ご遠慮無く離れてくださいまし」
か細い声でおよしがいうと、
「なにを言われるか。
当向島診療所の人気女医者が一日も早く元気にならねば、それこそ困るのは患者たちですぞ。
余計な気遣いはせずにお任せなされ」
井之上が優しくいうと横になったおよしの両眼から細く涙が流れた。
「どうかな井之上さんや」
笙船が顔を出し、井之上の隣に座った。
井之上も笙船もおよしの容体が予断ならぬものであることは承知していたが、唯一の慰めは自分たち医師が側にいたことで出血を早めに食い止められたことだっ

た。
本日の診療時間はすでに終わっており、これから母屋では夕食の膳を囲む時間が迫ってきていた。
「先生、私はおよしさんの側におりますのでその旨ご一同にお伝えください」
井之上がいうと笙船は、
「承知した。後で交代しましょうぞ」
といいながら腰を上げた。
笙船の声を耳にしながらおよしは深い眠りについた。

六

壮絶な戦いの一日が暮れた春貞の屋敷ではそれぞれがおよしの全快を願いながらも膳を囲んでいた。
「これこれ、ご一同。通夜みたいな食は体によくないでな、およしのことは井之

上さんにお任せし、せっかくの膳じゃ、美味しくいただこうぞ」
笙船が声を上げた。
とはいえ、診療所にいた子供が思いもかけず急に飛び出したことでおよしに怪我をさせたと弥三郎や佐吉はいつになく気落ちしていたし、診療所の入り口で暴漢と戦っていた幸江も何とか防げたことではなかったかと自分を責めていた。
そんな皆の気持ちを察した兄の留吉が箸を膳に置き、
「春貞さま、ご一同さま。およしの奴の不注意で皆様に多大なご心配とご迷惑をおかけしてます。申し訳ねえ」
と頭を下げた。
「馬鹿を申すな留吉。およしは子供を助けようとして被害に遭ったのだ。それにな、俺たちは皆およしを心配しているが迷惑だなんてことは考えてはおらん」
米道格左衛門が盃を呷りながら言い切った。
「ありがとうよ格左。
その通りだ留吉。だからな、皆でおよしの回復を祈ることにしようぞ」
春貞が言うと留吉は感極まって泣き出した。

弥生が自席を立ち、静かに留吉の背に回ったと思ったらその両手を留吉の肩に置き、

「せっかく富四郎さんの料理が冷めてしまいますよ。お食事が終わったら診療所に行き、井之上先生に許可をいただいておよしさんの顔をご覧になってきたらいかがですか」

そういうと留吉の泣き声が一段と大きくなった。

「母上。留吉の泣き虫に油を注ぎましたな」

春貞が笑うと膳を囲んでいる一同にも笑顔が生じた。

夕食が終わった後、奈美は留吉と共に富四郎が特別に調理した粥と膳ひとつを持って診療所に入った。

膳は勿論井之上新界の食事だが、粥はおよしに食べさせようと調理したものだった。

診療所の戸を開けようとしたとき、井之上新界の声が聞こえ二人は思わず立ち止まった。

「およしさん、うなされておったようだがまだ熱が下がらぬ。

私の声は届いているか…。
しっかりなされ。
なにを気の弱いことを言っているのか。医者として怒りますぞ」
しばし間が空いたが、二人にはおよしが何かを囁いたのではないかと思った。
「馬鹿をいってはいかん。皆がおよしさんのことを心から心配しておる。
それにな、こんなときに申すのもいかがなものかと思うが、およしさん。
元気になったら、私の嫁になってはくれませんか」
井之上新界の凜とした声が外まで聞こえ、直後におよしの嗚咽が聞こえ、
「いかんいかん、泣かせてしまった」
と井之上の照れたような声が聞こえた。
留吉と奈美は驚き、顔を見合わせた後、意を決して、
「井之上先生。膳をお持ちいたしました。
入ってよろしいでしょうか」
と声をかけた。
「お入りなされ。お手数をおかけします」
いつものとおりの静かな新界の声だった。

井之上新界はおよしが寝ている部屋を離れ、待合部屋まで留吉と奈美を誘った。
「私はここで膳をいただきますのでお二人はおよしさんに会ってきたらいかがですか」
井之上が奈美が置いた膳の前に座し、両手を合わせながら言った。
「そうさせていただきますが先生、およしの具合はいかがなんでしょうか」
留吉が問うた。
「深手なのが心配ですが縫合も上手くいったと思います。後はおよしさんが一日も早く直ろうという強い意志が欲しいところなのですが、さすがに気弱になっておるようで…」
そのとき奈美が、
「先生。白状しますと先ほど夫と膳をお運びした際、戸口の前で先生がおよしさんに言われた言葉が耳に入ってしまいました。
失礼ながらおよしさんを嫁にというのはご本心なのでしょうか、それとも励ましていただくつもりのお言葉なのでしょうか」
奈美が武士の娘の顔になって問うた。
「そうでしたか。聞かれてしまいましたか」

という井之上の表情には穏やかな笑みがあった。
「励ましといえばその通りですが、私の気持ちに嘘偽りはありません。
本当の気持ちです奈美さん」
井之上はまっすぐ奈美と留吉の顔を見ながら答えた。
「だ、だけど先生。およしは…吉原にいたんですぜ」
留吉が突っ込んだ。
「無論知ってます。しかしそれは今のおよしさんの素晴らしさを少しも邪魔することではありません。
そう思いませんか」
逆に問われ留吉は絶句し涙ぐんだ。
「そりゃあそうですが、あっしは実の兄だから身贔屓だ。しかし、せ、世間では北国者といえば時に白い目でみまさあ、先生。
先生のこれからに傷がつくようなことになったら、それこそおよし自身が嘆きまさあ」
兄だからこそいえる正直な気持ちだった。
「留吉さん。私は正直まだ吉原の大門を潜ったことはありませんが、長崎の色町

に連れて行かれたことが数度ありますからどのような場所かは承知しています。
しかしおよしさんは好き好んで北国に身を売られたわけではありませんし、逆にそうでもしなければ子どもが生きてはいけなかったと聞きました。
北国に限らず人にはできれば触れて欲しくない過去がひとつやふたつあるものですが私は人間の価値は昔の生き様ではなく、いまこの時の生き様で決まるものだと信じています。
いまのおよしさんはここに来る貧しい者たちからは菩薩のようなお人とみられていますし事実そうだといつも身近に居る私や笙船先生も思っています。
それでも世間がおよしさんを批難するなら私はこの身をもって守り抜きます。ですから是非是非およしさんと所帯を持つことをお許しください」
座した両膝に両手を置いた井之上新界が留吉に頭を下げ、留吉と奈美が慌てた。
「先生、お手をあげてくだせい。
井之上先生はそもそもおよしの命の恩人。
許すも許さないもありゃあしませんぜ。
叶うものなら先生、もらってやってくださいまし」
今度は留吉と奈美が両手を突き頭を下げ、二人で診療所を後にした。

当のおよしは傷の痛さと熱が原因で悪夢にうなされていた。
沢山の男たちに押さえつけられているようでもあり体が動かせない。次第に息苦しくなりこのままでは死んでしまうのではないかと恐怖で声を絞り出した。
「た、助けて！」
およしが悪夢の中で叫んだ。
「どうした。およしさん、しっかりなさい。
どんな夢を見たのか分からないが、私がずっとここにいますから安心なさい」
無意識におよしが虚空に伸ばした右手を井之上は両手で挟み込んだ。
「嗚呼、先生。わたし、まだ生きているんですね…」
目を覚ましたおよしがか細い声で呟き、一瞬嬉しそうな表情を見せ、また眠りについた。
そのとき、
「先生、入ってよろしいですか」
奈美の声が聞こえた。
「お入りなさい」

井之上の声に顔を見せた奈美は盆に載せた茶菓子と茶を運んで来た。
「先生、一息入れられたらお休み下さい。
明日の診療に響きますから、わたしが代わりにおよしさんの側におりますので」
と盆を座している井之上の横に置いた。
「ありがとう奈美さん。
ではそうさせてもらいましょうか」
美味そうに茶を啜った井之上は静かに部屋を出て行ったがその背に奈美は頭を下げた。

半時ほど経ったとき、およしが目を覚ますと枕元に奈美が座していることに気づいた。
「お姉さま、すみません…」
「あっ、目が覚めましたか。いま手ぬぐいを替えましょうね」
差し出した奈美の腕を弱々しくおよしが掴みながら、
「わたしのためにご面倒をおかけし、すみません」
と涙目で呟いた。

「何を言うの。こういうときはお互い様です。井之上先生が懸命の治療をしてくださってますから早く元気になりましょうね。留吉さんはもとより皆が、そして患者の皆さんも心配されていますよ」

奈美はおよしの兄、留吉の妻だからおよしにとって姉には間違いない。しかしおよしより六つも年下の奈美は「お姉さま」と呼ばれて些か照れ隠しにそう言った。

第五章　さらば弥三郎

一

向島診療所にとって事実およしの離脱は大変な影響を与えた。
この頃の診療所は毎日一五〇人前後の患者が来所していたから小川笙船と井之上新界の二人は気の休まる時がなかった。
およしは助手というよりすでに女医者として立ち振る舞っていたからすぐに代わりを務められる者などいなかったものの、助手として時に奈美が手伝ったが常勤として静香が頭角を現していた。
「静香さんは我らの気持ちの先を読んで動いてくれるで助かっておる」
笙船はそう春貞に報告していた。
「向島診療所第二の女医者になりますかな。静香は確かに機敏で勘働きができるようですからな」

春貞は茶を飲みながら応じた。
笙船は、
「確かに確かに。わしらはおかげで助かっておるが静香さんには特別の命があったはずじゃが、そちらを邪魔してしまって済まぬな春さん」
そういいながら軽く頭を下げた。
春貞は愉快そうに笑いながら、
「先生。静香本人も忍びもどきの稽古から診療所の手伝いに移って些か安堵しているようですな。
ひとり残念がっているのはとっつあんくらいでしょうか」
と言い切った。
静香の人並み以上の身体能力を生かして忍びの術を教え込もうと張り切っていたのは弥三郎だった。
無論それは春貞の軍師を自認する弥三郎の個人的な思いだけではない。
春貞には年々形にはならない、言い方を変えるなら捉えどころの無い役目が覆い被さってきていた。
それは春貞が八代将軍吉宗から生殺与奪の命を受けたただ一人の人物であったか

らだ。

春貞は吉宗の目と耳になり、市井の人々や旗本たちはもとより、ときには大目付や老中までをも監視し、幕政に問題ありと判断した場合は直接吉宗に換言できる立場とみなされた。

そして万一必要と判断したときには相手が誰であっても切り捨て御免がゆるされ吉宗以外、誰にも束縛されないただ一人の人であった。

弥三郎にいわせれば影の老中職を命じられたも同然だったがこのお役は明文化されたものでも正式なお役でもなかった。

そもそも老中の任用要件は、家禄が二万五千石以上の譜代大名であることだったが春貞はどこの藩にも属さずいわば一介の浪人身分だった。

それだけに春貞が動けば反発も必須だったし理由はともかくこの屋敷もこれまで何度も襲われて来たし一度は全焼となった。

とはいえ城とは違い高い石垣も深い堀もあるわけではなく万一外敵の攻撃を防ぐにはただただ屋敷の者達の腕に頼るしかなかった。

弥三郎にしてみれば己の老いを補填する意味で甥にあたる佐吉を屋敷に迎え入れたものの十分と思えなかったからこそ静香の能力を高め、技を研ぎ澄ませて少しでも守りに役立つ人材に育てたいと考えていたのだ。
幸いその成果はすこしずつ表に現れてきたが、およし欠員の穴を静香に埋めさせるとなればしばしの間、女忍びの訓練は休まなければならなかった。
しかし春貞の屋敷で大切なのは全員の調和と思いを一緒にすることと弥三郎も十分理解していたが気ばかりが急いて仕方がなかった。
「とっつあん、静香を診療所に取られて寂しいだろうが暫くは勘弁してくれ」
春貞が苦笑いしながら庭掃除をしている弥三郎に声をかけた。
弥三郎も顔を上げながら笑っていたが、
「あっしも耄碌したんでしょうな。何かと口だしし教えたくなるんですな。
そこの倉の屋根で捕らえた縁もゆかりもなかった他人様の娘なんですが、こんな気持ちは初めてで…」
そう呟く弥三郎の横顔を眺めた春貞は老いた御庭番と最初に出会ったときのことをふと思い出していた。

それは享保七年十二月、小石川養生所が開所の準備で慌ただしいときだったが、まだ名も知らぬ老爺ができたばかりの小さな門前を掃いていた。
診療所から褞袍と首巻き姿で飛び出した春貞に老爺は、
「寒くなったねぇ、春さん」
と声をかけたその老爺が弥三郎だった。
そのとき春貞は弥三郎の正体をまだ知らなかったが、その身のこなしなどからただの老爺ではないことは感じていた。
「はじめてとっつあんと出会ったときも爺様に思えたが、あれは姿形をわざと老爺にしていたのかい」
思い出した春貞はそのまま口にした。
「何をまた昔の事をおっしゃっているのか…」
苦笑いしながらも弥三郎は縁側に腰をかけながら、
「とにかく下働きの老爺に徹して養生所と先生方そして入所者を守れというのがあのお方の命でございましたからな。
腰の治療で笙船先生に診ていただきそのまま居着いた老爺という仕儀になりましたので」

そのとき、門前を掃き掃除していた横手富三郎がゆっくりと近づき、春貞と弥三郎に軽く頭を下げながら弥三郎の隣に腰を掛けた。
「そうだったなあ。しかしそれが縁でこうして十九年も俺の軍師として働いてくれている。
縁とは不思議なものよなあ」
春貞は深まってきた秋空を仰ぎながら呟いた。
そのとき、
「弥三郎さん、いかがなされた。どうなされた！」
隣に座っていた横手が叫んだ。
春貞が振り向くと弥三郎の体は横手富三郎の両腕に支えられ両眼は虚ろだった。
「とっつあん。しっかりしろ。
横手、診療所に運び込むぞ。
手伝ってくれ」
春貞の命で二人は弥三郎の体を抱えたが春貞はその軽い体重に背筋が寒くなった。
「先生。頼む、とっつあんを診てくれ」

すでに患者も途切れ、今日の診療を終えようとしていた小川笙船と井之上新界が何ごとかと立ち上がった。
その弥三郎の姿を見た静香は、
「先生！」
悲痛な声を上げながら弥三郎の体に飛びついた。
「静香さん、気持ちは分かるが体を揺らしてはならぬ。静かにこちらに寝かしておくれ」
と笙船は言いながら春貞を見、
「どうされた」
と問うた。
井之上は早速弥三郎の着物の襟元を開き耳をあてながら脈を取っていた。
「お、俺たちと縁側で話しをしていたときに意識を失ったんだ。先生、とっつあんはどうしたんだ」
春貞はさすがに慌てていた。
笙船は春貞に相対したまま顔を井之上の方に向けると井之上は悲しそうに顔を左右に振った。

「どうやら心の臓の発作のようじゃ」
笙船が悲痛な顔で呟くと、春貞と静香そして横手の三人は同時に弥三郎の顔を覗き込んだ。しかしその顔にはすでに死の影が現れていた。
「とっつあん！」
「弥三郎どの」
「先生！」
寛保二年（一七四二年）九月一日、稀代の御庭番が逝った。享年七十歳だった。

二

弥三郎の死に幸江の落胆は大きかった。
春貞と夫婦になる前に命を助けられたこともあったし、この屋敷でずっと一緒だった。
後で春貞に、

「幸江、お前の泣き様は父上が亡くなったときより激しいと皆が言っていたぜ」
と言われるほどだった。
翌日姿を見せた佐吉の落胆も大きかった。
さすがに己の喜怒哀楽をも制御する訓練を受けてきたからか泣き叫ぶことはなかったがその落胆ぶりは見る者の心を打った。
「春貞さま。一ヶ月ほど前のことでしたか、あっしにご自分の分身のように大切にしてきた匕首を『これはわっしの形見だ。最近は忘れていた母親が夢に出てくるようになった。そろそろお迎えの時かも知れねえからな』と言いながらあっしに押しつけるようになさったばかりでした」
弥三郎に天才とまで言わしめた佐吉がその両眼から細い涙を垂らしながら、
「しかし春貞さま。叔父貴は幸せな男です。
春貞さまと出会い、それまでの御庭番時代には思いもよらなかった平穏な生き方ができただけでなく、お陰様で畳の上で往生できたのですから。
これは御庭番として希有なことでございます」
と頭を下げた。
「いや、世話になったのは俺の方だ。

俺は笙船先生と弥三郎とっつあんのおかげでここまできたというのが本音よ」
涙を見せたくなかったのか春貞は天井を仰ぎながら、
「佐吉、とっつあんの葬儀が終わったらきちんと話し合う場を作るで、とっつあんの代わりに二代目弥三郎を継いではくれめいか」
というと思わず平伏した佐吉は、
「叔父貴のようにはまいりませんでしょうが、あのお方の命でもございますので是非ご指導願います」
と言い切った。
「ありがとうよ。でな、こんなときに済まぬがあのお方にこの事を知らせてもらえねえか。
そうそう、とっつあんは家族として俺たちの菩提寺に埋葬することも伝えてくれ」
「承知いたしました」
佐吉は涙を袖で拭きながら立ち上がり、居間から消えた。
弥三郎の葬儀は春貞の屋敷内でしめやかに行われた。

屋敷の一同の他に葬儀に出席したのは小石川養生所の二代目肝煎り小川隆好と夏穂の両親長兵衛と糸、両替商相模屋の隠居清右衛門、そして越後屋の隠居三井高房だけだった。

「派手にやるととっつあんに叱られようぜ。忍びの葬儀などいらぬとな」

春貞は嗚咽を抑えながらも呟いたが、遺体の世話は小川笙船はもとよりだったが幸江と弥三郎自身が己の娘のようだと言っていた静香が甲斐甲斐しく立ち振る舞っていた。

棒術の師匠として世話になった留吉もしばし呆然としていたが、

「あっしも、中間仲間、偽金作りの仲間に殺されそうになったときに格左衛門さまと弥三郎さまに助けていただいたんだ。

恩もお返しできず済まねえ」

と泣いていた。

また弥三郎の遺体の前には米道格左衛門と堀田万之助が男泣きし、その横に座していた幸江と理子が手を取り合い人目も憚らずしゃくり上げていた。

葬儀に間に合うように戻ってきた佐吉はしみじみと、

「屍となってもそのままうち捨てられるのが忍びでございますが、叔父貴はこれ

ほどの方達に泣いていただき幸せな男でございますな」
と呟くと、
「それがしはまだご縁が短かったですが、弥三郎どののお人柄はとても御庭番とは思えない穏やかなものでしたな。
ただ一度、春江館でお手合わせしていただいたことがございましたが『老いたので昔のようには動けない』と言いながらもそれがしの繰り出す槍先を見事にかわし続けたのには驚きました」
と横手富三郎が話した。
焼香を終えた小川笙船も話しに加わった。
「いやはや、小石川養生所は春さんと弥三郎さんのおかげで運営がなんとか進んだのじゃ。いくら感謝しても感謝仕切れぬのう」
そんな話しの中心は縁戚だという佐吉だった。
「佐吉どの、弥三郎どのは独り身だったのでござるか。家族はいないのかな」
横手富三郎がしんみりと問うた。
「横手さま、忍びも人の子。親がおるからこその存在ですが、一人前になると女房子供はお役目の邪魔になります」

「邪魔と…」
「はい。鉄砲玉のように出たっきり一年も二年も戻ってこれないこともございます。そんな父親ではいない方がましでしょう。
それに忍びは影の存在、しかし女房子供まで隠すことは難しゅうございますから時には女房子供を人質にお役目を阻止しようとする者も出てきます」
「うーむ」
「叔父貴も若い頃には思い女もいたことでしょうが、女房とした途端に足枷となることを十分承知しておりましたから表向きは生涯独り身で通しました」
茶を飲んでいた春貞があらためて問うた。
「佐吉。とっつあんは昔、自分は大番組頭だった加納政直様の家系に繋がる者だと教えてくれたことがあったが、だとすれば家系は存在するのではないかな。
いや、俺がこんなことを聞くのはとっつあんを家族と思うておるで我らの菩提寺に葬ることにしたが、それで後々親戚筋などから苦情がこないかと思ってな」
春貞がいうと、
「加納政直様といえば、確か上様ご幼少の頃、母御のご身分が低かったからかすぐに養子に出された先だとか…」

格左衛門が言った。
「そうよ。その加納家につながる者だからこそ上様の絶大なる信頼があったということだ」
春貞が応じた。
佐吉はあらためて春貞に向かい直し、
「春貞さま。叔父貴は一人前の忍びになったときから家族は捨てた人間です。また何よりも上様が春貞さまの家族の一員として葬ることをお認めくださいました。
どこからも苦情など来るはずもございませんし、なによりも叔父貴自身が喜んでおりましょう」
と言い切った。
「それならよい。しかしもう少し俺たちの側にいて欲しかった…」
春貞が愚痴のような言葉を言うと佐吉は、
「叔父貴に思い残すことなどありませんでしょう。
しいて申すなら静香さんとの時間をいま少し欲しかったのではないかと…」
その言を聞き、静香が堰が切れたように号泣し始めた。

「思う存分お泣きなされ。
弥三郎どのの供養にもなりましょう。
なにしろ私にも『娘のような気がして』とおっしゃっておりましたからね」
弥生が静香の背中を抱くようにして呟くと静香の泣き声が一段と大きくなった。

三

その夜から二日姿を消していた佐吉が居間にいた春貞の前に現れた。居間には春貞の他に母弥生と友子そして田宮助左衛門がいた。
「どうした。またなにか厄介事か」
刀の手入れをしていた春貞が顔を上げずに問うた。
「春貞さま。厄介事の上にさらに厄介事が生じる前兆のような気がいたします」
春貞の前に座した佐吉が呟いた。
「ふむ。聞かせてくれ」

抜き身を鞘に収めながら春貞が願うと佐吉が静かに話し出した。
「予想はしておりましたがこの大水害の後始末を幕府は手伝い普請で乗りきろうと決めたようなのです」
「ふむ。上様ご自身もそんなことを言われていたな」
春貞が応じると、
「それが厄介事なのですか」
茶器を置きながら弥生が聞いた。
「はい、大奥さま。
幕府としては他に方策がないと判断したに違いありませんが、手伝い普請を巡り幕閣は勿論西国大名たちに困惑と混乱が始まっておりますんで…」
「……」
「御庭番ふぜいが口にすることではございませぬが、今回の大水害による被害はまだまだ納まってはおりません。
例えば利根川流域の被害者は神社や寺に避難できた場合は良い方でして、親類縁者が掘っ立て小屋を建てて一緒に暮らしたり、土橋の下に住んだりと乞食同然の家族も少なくありません。それにこれから季節は冬に向かいます。

崩れ落ちた民家の戸板などを燃やしては暖を取っておりますが、子供たちは炭俵を巻いて寒さを凌いでいるといったありさま。
関八州はもとより信州の大河川流域は生き地獄の惨状でして、流域の村々が全てを負担し独自の復旧工事を行う自普請を強いることはできない相談なのです」
佐吉が苦渋の表情で言った。
「だからこそ幕府としては手伝い普請に頼らざるを得ないということか」
春貞も天井を仰いだ。
「はい。ご承知のように経済改革も飢饉やらで効果が上がらないいま、他に方策がないようです。
問題は…」
「どの藩に手伝い普請を命じるかだな」
春貞が口に出すと佐吉は無言で頷いた。
「まだ命は出ておりませんが、諸大名、特に外様大名に手伝い普請を命じるしか策はございませんが、各藩はいま混乱のありさまなのです」
大水害の発端から二か月近くが過ぎた九月末になると各藩の江戸詰留守居役たちは戦々恐々となっていた。

なぜならもし手伝い普請を命じられれば人夫の賃金、施設の建築費用、藩士達の出張滞在費などを負担せざるを得ず、巨額の出費を強いられるからだ。
それは自藩の財政を極度に圧迫する結果につながるに違いない。
「なるほどな。
まあ俺たちにはこの江戸、それも近隣の者たちが精々目に届くかどうかだ。何も出来ずに心苦しいが佐吉、今後も情報を頼む」
春貞が命じた。

それから五日後の昼過ぎ、屋敷に来訪者があった。
「旦那、土佐藩江戸家老、末松次郎左衛門さまと名乗られておりますがいかがしましょう」
取り次いだ留吉が困惑の体で問うた。
「聞いたことも会ったことも無い御仁のようだが、江戸家老を粗略に扱うこともできまい。
客間にお通しせよ」
春貞が首を傾げながら立ち上がった。

いつもの袷の着流しと椿の柄の首巻きをした春貞が客間に向かうと従者か続く廊下に若い侍が座し平伏した。そして座敷には壮年の武士がこれまた春貞に丁寧に頭を下げた。

「俺が松平春貞だが、まずは楽にしてくれ。ここは城でも藩邸でもないただの私邸だからな」

と磊落に語りかけた。

侍は、

「はじめてお目にかかりまする。

それがしは土佐藩江戸家老、末松次郎左衛門でござる。

この度は是非にもお願いがあり伺いました」

と頭を下げながら言った。

「願いはともかく頭を上げてくれ。それじゃあ話しもできんだろうよ。

しかし土佐藩江戸家老どのともあろうお方が何故に来られた」

苦笑しながら春貞が座すと末松次郎左衛門は一膝前に進み、

「単刀直入に申し上げる。

お手前は上様に最も信頼されているお方と聞き及び、願いありてこうしてご無礼を承知でお伺いいたした次第。
我が土佐藩に手伝い普請のお役目が無きようお取り計らいくださらぬか。
この通りでござる」
決死の表情で言い切った。
「なんと…」
春貞も驚いた。
末松次郎左衛門は背後に置いてあった重そうな風呂敷包みを春貞の前に差し出し、
「春貞どのはこうした物品は決してお受け取りにならないと聞き及びましたが、願いばかりでは無礼を重ねることになり申す。我らの心づもりを多少たりとも形にしなければと恥を忍んで持参いたしました。
何卒…お受け取りを…」
平伏しながらも末松次郎左衛門の声も心なしか震えていた。
「これは袖の下ですかな」
優しくも春貞の声が響いた。

「なにとぞ、なにとぞ」
末松次郎左衛門は畳に額を着けながら話しを続けた。
「我が藩は先の飢饉の際、財政の行き詰まりから幕府より一万五千両余りを借り受け、藩財政再建を目指してまいりましたがまだまだ目に見える効果が出ておりませぬ。
そこに万一手伝い普請を命じられれば十分お役目を果たすことができないばかりか、藩はお取りつぶしになるに違いありませぬ。
身勝手なことは承知の上で春貞どののお力をお借りしたいと罷り越しました」
「話しは分かったが、俺は一介の浪人者だ。幕閣たちが決めたことをひっくり返すことなどできようもないぜ」
春貞は静かに言い、
「このこと、藩主山内豊敷さまはご承知か」
と問うた。
「それがし、本件につきましては全権を任されており申す。したがいましてお願いは藩主の願いでもございます」
「もういちど言う。俺に期待されるような力はねぇ。

これを持ち帰っていただこう」
春貞が言うと、
「ご迷惑であることは重々承知しておりまするが、それがしも物見遊山ではござらぬ。
お受け取りいただけなければこの皺腹掻き切って殿にお詫びを申し上げるしかござらぬ」
末松次郎左衛門は左手で腰から脇差しを抜き春貞を睨んだ。
しばし沈思していた春貞は、
「分かった、分かった。俺は何も出来ぬが、貴殿は立派にお役目を果たしたという印にお望み通りこれは受け取っておくでお帰り願おう」
と静かに言い切った。
土佐藩江戸家老が疲れ切った様子で帰った後、桐箱を開けると小判でちょうど百両が敷き詰められていた。
居間に入ってきた田宮助左衛門が、
「門前までお送りしましたが、やはり陳情でございましたか」
と小判を見つつ言った。

「佐吉から話しは聞いていたが、確かにこれは思っていた以上に大変な事になりそうだな」
春貞もどうしたものかと座ったまま考えていた。
「春貞さま。これは続くかも知れませぬな」
助左衛門が春貞の前に座して言った。
「うむ…」
「西国の外様大名としては手伝い普請に指名されるかどうかは生き死にの問題でございましょう。
春貞さまが上様の覚え愛でたいお方であることはすでに知られている事実。だとすればあの土佐藩でことが終わるとも思えません」
「こうしたことが続くと申すか」
憮然と春貞が問うと助左衛門は、
「続くのではございますまいか。
不遜な物言いなれど、この際の百両や二百両は当事者にとってはした金でございましょう。しばらくは春貞さまへの陳情が続くと思います」
と言い切った。

「それにしても春貞さま。金を何故にお受け取りになりましたか」
助左衛門が問うた。
「そのことよ。無論突き返すべきだが俺が断ればあの御仁、本当に腹を切るだろうと思ってな。
彼らは藁にもすがるつもりでこれまで縁もゆかりも無かった俺の所に来たんだ。万に一つも上様や幕閣に口利きしてもらえるかと思ってな。
だから無下に突き返せばその場で腹を切りかねねえ。したがって一介の浪人者に期待されては困るという意志は伝えるとしてもだ、菓子折の金は江戸の普請に役立てると明言して受け取ることにしたのだ。
そうであれば使いに来た江戸家老の顔も立つと思うてな」
ということで助左衛門、これは取りあえず預かりとして処理してくれぬか」
と願い。続けて、
「願いついでじゃが、今後この手の話しで来る者があればご苦労だがお主が俺の名代として対応してくれ。そしてな、よほどの無礼者でなければ金は受け取ってやれ。
江戸家老といった地位のある男が理由はともあれ頭を下げて差し出した金を突き

返されては帰れぬだろうからな」
春貞はにやりと笑いながら助左衛門に命じた。

春貞が予期したようにその翌日から立て続けに佐賀藩、熊本藩、広島藩、薩摩藩の重臣たちが屋敷を訪れ、「幕閣へ手伝い普請に選ばれぬようよしなに」と対応した助左衛門に悲痛な訴えと願いを繰り返して帰って行った。
「春貞さま。それがしも役人の端くれでございましたが方法はともかく同情を禁じえませぬ。
どうやらお上は手伝い普請の過程でいくつか外様大名が無くなっても仕方がないとお考えのように思えます。
佐吉さんのいうとおり、厳しい冬を越さなければならない者たちが増えそうでございますな」
さすが百戦錬磨の助左衛門がため息をついた。
「侍達が路頭に迷えばそれに付随する多くの民がそれ以上の難儀をすることになる。上様苦渋のご決断に違いはなかろうが気が滅入るよなあ。
そう、大名家たちが持ち込んだ金は全部でいかほどになったのか」

春貞が問うと、
「全部で五つの藩から持ち込まれた金額は千二百両になりました」
助左衛門が即座に答えた。

四

十月六日、ついに幕命が下った。
将軍に次ぐ実力者、老中松平左近将監乗邑らの裁定として十の大名に手伝い普請が特命されたのだった。
それらは肥後・熊本藩、長門・萩藩、伊勢・津藩、備前・岡山藩、備後・福山藩、但馬・出石藩、越前・鯖江藩、讃岐・丸亀藩、日向・飫肥藩、そして豊後・臼杵藩だった。
「なぜこの十藩が選ばれたのでしょうな」
夕餉が終わった席で助左衛門が絞り出すような声を発した。

「まあ、ひとつに今回の大水害に直接大きな被害を受けなかった藩ということだよろうな。そしてな…」
春貞の一呼吸を受けて格左衛門が、
「あの飢饉の時、関東甲信越の藩から穀類や資金の援助を受けた藩に返礼せよという意味もあるのではないかな」
と唸るように言い切った。そのとき、
「春貞…」
弥生が声をかけた。
「はい」
「この屋敷に来訪された藩は五藩と聞きました」
母弥生の言に春貞は、
「確かに土佐藩、佐賀藩、熊本藩、広島藩そして薩摩藩の五藩ですな」
と答えると笑みを浮かべた弥生が、
「春貞の思いとは関係なく、そなたは幕閣に物申す力があると評価されましょうな。何故なら結局陳情に来られた五つの藩のうち手伝い普請を命じられたのは肥後・熊本藩のみ。

春貞詣は霊験あらたかとの噂も立ちましょうぞ」
と苦笑した。
春貞も苦笑いしながら、
「助左衛門。預かりの金すべてをな、い組の頭に渡してくれ。江戸の町もいまだ酷い状態だ。少しでも復興の費えになればと俺がいっていたとな」
春貞は機嫌良く命じた。

普請を命じられた各藩の責任者達にとって、いや人足達にいたるまですべての人にとって過酷な命となった。
多くの普請奉行達は濁流にあらわれた荒地を眼前にして呆然と立ちすくんだに違いない。
人手不足、資金不足がたたり普請工事の準備もなかなかままならなかったし、人足達が寝泊まりする場所の確保も困難を極めた。
そうした中にあって幕府の現場役人が賃金の一部を搾取しようとする不正も横行し激務に耐えられず普請の現場から逃げ出す者も相次いだ。したがってさらに賃金を上げなければ人も集まらなくなった。

先の話になるが、例えば薩摩藩では一七五三年（宝暦三年）に命じられた木曽川改修工事（宝暦治水）の多大な出費により、所領が現場から遠いことも関係し藩財政は危殆に瀕した。

工事を指揮した薩摩藩家老平田靱負は、多くの犠牲者と藩財政の疲弊の責任を取って工事完了後に自害している。

一方、弥三郎の葬儀が一区切り付いた頃、幸いなことにおよしの容体が回復に向かっていた。

無論およしの側には可能な限り井之上新界がついていた。

「およしさん。痛みはまだあるだろうが傷はきちんと治りかけています。この調子でいけば後小一カ月で起きられると思いますよ」

井之上が寝ているおよしを診察してそう言った。

「先生。ありがとうございます。

先生は命の恩人です」

およしはか細い声で礼をいうと井之上は、

「私は医者のはしくれとして当然のことをしたまでです。それに私だけの力では

なく笙船先生はもとよりお屋敷のご一同の祈りが天に通じたのでしょう。
しかしよかった…よかった」
井之上は包帯を取り替えながら心からそう呟いた。
そのとき、小川笙船が姿を現した。
「およし、あのお文さんがお前さんの見舞いだとほれ野菜をいろいろと持参してくれたぞ」
と駕籠一杯の野菜を上がり框に置いた。
「お文さんというとあの足を切った女房ですか」
「そうだ。一ヶ月ほど前に来所した際、井之上先生が設計された義足を初めて着けた際『およし先生のお姿が見えないが』と聞くのでな、簡単に事情を話したら痛く心配してのう、『井之上先生はもとよりだが女先生には大変よくしていただいた。夫婦で毎朝毎晩およし先生の回復を神仏にお祈りしますで早くよくなってください』とこの通り見舞いまでいただいたのじゃ」
笙船がそういうとおよしの両肩が震え嗚咽をはじめた。
「あ、あの方たちにとってこれだけの野菜がいかに大切なものであるか…。それを私にですか」

寝ているおよしの涙が蒲団を濡らした。
「そうじゃ。それだけお前さんがまた診療所で活躍するのを待ち望んでおるのじゃよ。
それはお文さん夫婦だけのことではない。
沢山の患者が早く女先生の元気な姿が見たいと言っておる。
医者としてこれほど嬉しきことはないぞ、およし。
無理は禁物じゃが、井之上先生の懸命な治療のおかげでここまで回復した。もう大丈夫じゃろうて。
一日も早く元気な姿を皆に見せてやらんとな」
笙船の言に井之上も何度も頷いていた。

翌日、い組の政五郎が慌てて飛んできた。
「春さん、いつも貴方には驚かされるがあっしも千二百両などという金をこの目で拝んだのは初めてだったので腰が抜けそうだ」
と息を切らして喋り始めた。
「話しは田宮の旦那にお聞きしましたが、それにしてもいいんですかい、こんな

大金をあっしなどに託されて…」
「この江戸の町を少しでも早く元に戻してえ。特に家を失い親を失った子供たちが不憫だ。
頭に預ければ様々な普請に役立ててくれようじゃないか。
そしてな、そうであれば腹を切る覚悟で俺の所へ袖の下を持参した男たちの心意気も無駄にはなるめい。
そうだろう頭…」
春貞が応えると涙ぐんでいた政五郎が、
「い、今更だが…なんていうお人なんだ。旦那は」
と男泣きに泣き始めた。

混乱続きの江戸の町も秋を感じる季節になった。
小川笙船が稽古を終え春江館から出てきた春貞を母屋ではなく茶室へと誘った。
「春さん、年寄りのお節介かも知れぬがお前さんの耳に入れておきたいことがあるんじゃがな」
「なんでしょうかな先生。茶室とはまた珍しい。

他に聞かれてはまずい話しですか」
春貞が問うと、
「いや、しかし今のところはお前さんだけに聞いて貰った方がよいと思うてのことだがな。
ただし留吉さんと奈美さんはすでに存じている話しじゃ…。
それにたまには私の点てた茶を馳走したいと思ってな。
沙代さまが亡くなってから茶室に足を向けることが少なくなったで些か寂しく思っていたが、先日静香さんが茶室の掃除をし、花を生けておるところに接してのう、ちょうどよいところだからと一服馳走になったのでこれはお裾分けじゃ」
笑いながら笙船が座し、春貞にも座るように願った。
すでに釜の湯は沸いているようだった。
「春さん。井之上先生とおよしのことじゃ」
笙船が手際よく薄茶を点て茶器を春貞の前に置きながら和やかに話し始めた。
「頂戴します」
春貞は軽く頭を下げて作法通りに茶器を両手に包んだ。
「先般の洪水後に屋敷の倉が襲われた騒動のときあたりからだったが、二人は互

いに思い人になったようじゃな」
「ほう、およしの傷を井之上先生が賢明に治療したことからですかな」
「具体的なきっかけはそうなるのだろうが、いつも一緒に居るわしは随分と前から薄々そんな気配を感じておったが…先日奈美さんから話しを聞き相談されたのじゃ」
笙船は自分の茶を手にしながら、
「問題はおよしの心の傷が我々が思っている以上に深い事じゃ」
「およしが北国（吉原）にいたことですか」
「そうじゃ」
「井之上先生はそのことなら最初から知っておるはずですな」
春貞が美味そうに口にした器を静かに置きながら頭を下げた。
「笙船先生。二人は出来ることなら夫婦になりたいと思っているのですかな」
春貞が問うた。
「井之上先生は間違いなくそう願っておる。
留吉さんと奈美さんに口に出して願ったというしな。無論およしも同じじゃろうが、己の過去が邪魔して思いを遂げるなど不謹慎だと信じてしまっているような

のじゃ」
「なるほど。先生達のおかげで過去から立ち直ったと思っておりましたがまだまだおよしの心には根が深い闇があるのでしょうな」
春貞は腕組みしながら呟いた。
「それは仕方のないことよ。なにしろ物心ついたころには吉原に売られ、春さんに身請けされるまで郭の中で生きてきたのじゃからな」
笙船は茶室に静香が活けた一輪の桔梗の花に目をやりながら考え込んだ。
「わかりました。おせっかい役の俺に何が出来るか考えてみましょう」
春貞が言い切った。

春貞と笙船が話し合った数日後、向島診療所には久しぶりにおよしの姿があった。
大怪我をしてから早くも三ヶ月近くが過ぎた。とはいっても以前のようにはまだ立ち振る舞いができなかったのでもっぱら患者の受付と薬の調合を手伝い始めていたが、体力を使う場合は奈美や静香が働いていた。
また肩から胸に至る長い傷はすでに完全に癒着し塞がっていたが、その傷跡はい

かに重傷だったかを思わせたものだったし、まだ皮膚の引きつりを感じていた。
ということで井之上新界は万一の場合をと晒しで半身を覆うようにさせていた。
「およし先生！」
「およし先生よかったね」
「先生、元気になったんだ」
待合部屋で子供たちや女房らに声をかけられたおよしは嗚咽を我慢していたが、時にその肩が大きく揺れた。

同時刻、幸江と静香の二人は春貞の命で須田町の岡っ引き、岩次郎の宅へ向かっていた。
勿論舟を操った留吉も赤樫の棒を携え、かつ大きめの荷物を肩に掛け二人の後を歩いていた。
岩次郎は大洪水の後に浪人達から受けた傷が意外と後を引き伏せっていると聞いたため駕籠を頼んで向島診療所に連れてくることになっていた。
下町一帯は洪水の後、懸命の復興をと幕府は力を注いでいたがまだまだ爪痕はあちらこちらに大きく残っていたし泥まみれの建物も目立った。

そんな中だからこそか、地味ながら趣味の良い小紋の袷を着た幸江と静香の姿は大いに目立った。
「静香さん、あなたとふたりでこうして歩くのは初めてですね」
幸江が笑顔を向けると見舞いの風呂敷包みを抱えた静香は嬉しそうに、
「はい。嬉しいです」
と答えた。
「ここのところ、ずっと屋敷から出る機会がありませんでしたから窮屈だったのではありませぬか」
幸江が懸念を向けると静香は、
「そんなことはございません。お屋敷の毎日は刺激に満ち満ちていますし退屈している時間はございません。それに…」
「……」
「先生（弥三郎）の葬儀もございましたし秋子さまのご出産もございました。おかげさまで充実した毎日を過ごさせていただいております」
「そうであればよいのですが」
幸江がそう返事をしたとき薄汚れた着流しの浪人者が前後六人で幸江たちを取り

囲んだ。
「どこかの屋敷の内儀のようだが、懐の財布を大人しく差し出せ。
でないと身ぐるみ剥ぐことになるぜ」
女二人と従者一人と見た浪人たちが酒代でも強請ろうと懐手しながら近づいて来
た。
幸江と静香は無論無腰であったから文字通りどこかの商家の内儀と娘とでも思っ
たのだろうか。
留吉が前に出ようとしたとき、幸江が左手で制止しながら、
「馬鹿な真似はお止めなされ。
ここは大江戸市中でございますよ。
あなた達の思うように事は運びませぬ」
幸江の物言いが感に障ったか、一人が無言で鯉口を切った…瞬間、反動も無く静
香がふわりと舞い上がり、男の顔面を蹴り上げていた。
悲鳴もあげずに這いつくばった仲間を見て後の五人が頭に血が上ったか抜刀して
向かってきた。
道行く人たちの多くは幸江が何者であるかを知っていた。

「嗚呼、あの馬鹿ども、相手が悪すぎるよ」
通りかかった棒手振が声を上げた。
二人に掴みかかろうとした刹那、静香の片手が真横に振られた。
「ぎゃあ！」
前の三人が刀を取り落とし、地べたを転げ回った。
その男たちの両眼には静香が音もなく投げた鉄片が刺さっていた。
弥三郎直伝の技だった。
と同時に後ろの二人も留吉が手にしていた赤樫の棒で両鬢を打たれ、一間ほど吹っ飛んでいた。
あっという間の出来事だったが幸江の、
「さあ、急ぎますよ」
という声で何ごともなかったかのように三人が歩き始め、道行く人たちの間で拍手が起こった。

岩次郎はやはり伏せていた。
傷や腫れは回復に向かっていたが食欲も落ちげっそりと痩せてしまっていた。枕

元には女房の梅が薬を煎じていたが、
「げっ、これは若奥さま。
どうしてここへ」
半身を起こしながら岩次郎が声を上げ、梅は思わず頭を下げた。
「夫の命でお迎えに来たのです。
奥様、しばらくの間ご主人様を我らの診療所でお預かりいたしますのでご承知下さいますように」
幸江がにこやかに説明すると梅は、
「あ、ありがとうございます。
ここのところ食欲も無く、立ち上がる気力もないようで心配しておりました。
ご厄介をおかけしますがよろしくお願いします」
と両手を畳につけて頭を下げ、
「お前さん、よかったね。
あたしのことは心配しないで大丈夫だからしばし養生しておくれ」
と岩五郎に言った。
当の岩五郎は泣きながら頭を上げ下げしていたが、留吉が、

「おっ、若奥さま駕籠が来たようですね。
早速戻りましょうぞ」
岩次郎に肩を貸しながら立ち上がった。
「お預かりすると言っても大川のすぐ向こうです。
いつでも様子を見にいらしてください。
それと後になってしまいましたがこれはお見舞いの品。ささやかでございますが
お収め下さい」
幸江が荷物を差し出しながら座を立った。
岩次郎に肩を貸しながら留吉が、
「親分、一人で天井眺めていても直らんですぜ。
向島診療所ならご承知のようにお医師も天下一だ。
安心して治療してください」
そういうと、
「留吉。いや留吉さん、本当に春の旦那が俺を連れてこいと…」
半信半疑で言い、
留吉が無言で頷くと、

「あっしがまだ直りきらずに伏せていることを何故旦那がご存じなのか」
不思議そうに頭を傾げると留吉が、
「親分、浅太郎さんが心配して先日旦那に相談しに来られたんですよ」
と種を明かした。
「あ、あの読売やろうがか。よ、余計な…小癪な真似をしやがって…あ、ありがてえ」
岩次郎は玄関先に待っていた町籠に乗り込みながら両手を合わせた。
子分ら三十人ほどが梅と一緒に玄関先に並び、
「親分、いってらっしゃい」
と頭を下げた。
その様子を静香が不思議なものでも見るように眺めていた。

向島診療所に運び込まれた岩次郎は早速小川笙船と井之上新界の診断を受けた。
運び込んだ留吉も自分らの仲人を務めた岩次郎を放っておけず、そのまま付き添っていた。
「ふむ。傷はほぼ完治していると思うが、これは五臓六腑のどこかに殴られた影

響が及んでいるのかも知れんな。
どうじゃ井之上さん」
「はい。鳩尾あたりを強く殴られていますから胃の腑がやられているのでしょうか」
「となれば手術というわけにもいかない。
適切な薬湯を処方すると同時に食事療法も重要じゃな」
「はい」
笙船は仰向けになっている岩次郎の胸から腹までを丁寧に両手の指と腹で押しながら、
「親分、痛く感じるところがあれば教えなされ」
とさらなる診察が始まった。
「せ、先生方。ひとつ話しを聞いて下され」
岩次郎が寝たまま願った。
「食欲がないのが困りものなんですが、もうひとつ。
顔を殴られたときに…このとおり…残っていた歯をほとんど折られましてな、物を噛めないんですわ」

と嘆いた。
一瞬笙船と新界が視線を合わせて頷いた。
それに気づいたおよしが、
「先生方、いかがされました」
と問うた。
「いや、なに。過日井之上先生とな、義歯の話しをしておったところなのじゃ。
機会があれば試して見たいとな。
意外に早く機会が訪れたな」
笙船が嬉しそうに笑うと、
「義歯って入れ歯のことですね」
およしが問うと笙船が頷いた。
岩次郎が、
「先生、あっしは実験台ですかい」
と怖そうな顔をしながらも、
「その、入れ歯とやらを使うときちんと物を噛むことができますので」
と問うた。

「調整が難しいですが理屈はそうなのです。
食べ物が噛めれば味も分かり食欲も増すし消化も良いですから胃の腑にも負担がかかりません。
畏れ多くも東照大権現様（徳川家康）も義歯をお使いだったと聞いておりますが歯は健康にとても大事なのです親分」
井之上新界が岩次郎の口内をざっと診察しながらそう説明した。
「古い時代から木床義歯（もくしょうぎし）と言ってな、ツゲの木を彫って義歯を作るのじゃ。ツゲは密度が高く固いこともあり、義歯に最適な材料なのだが作るのが難しい…」
笙船がそう言い切った。
新界も、
「上下の歯は噛み合わせが重要ですし、口内の型に合わせて作らないと使い物になりません。蜜蝋で型を取りその通りに緻密な木彫りができるお人は滅多にいないのです」と俯いた。
「しかしお作りになれるお人もいるにはいるんですね」
およしがたたみ込んだ。

「まあな。そうしたことができるのは一般的には仏師とか宮大工じゃよ」
「なるほど。木彫には精通していますからね」
およしが納得の顔で頷いた。
そのとき留吉が、
「先生方、その義歯の彫り物ですが試しにあっしにやらせてもらえませんか」
と願った。
「嗚呼、留吉さんには弥三郎さんと一緒に先般義足を作っていただきましたな」
新界が思わず膝を叩いた。
「それに留吉さんは絵が達者じゃ。ものを正確に写すことにも秀でておろう。
是非試してもらえんかのう。
春さんにはわしから願っておくでな」
笙船の表情も明るくなった。
そのとき、
「先生方、親分さん。お茶が入りましたので一息入れてくださいと母の言葉です」
と理子が盆に茶器を乗せて入ってきた。

「おお、理子さまにこんなことをさせ申し訳ない」
笙船が笑顔で盆を受け取ったが、その日から岩次郎は向島診療所に入所扱いとなった。
そして本来なら診療所奥の部屋に寝かされるはずだったが春貞が、知らない仲ではないし一人では寂しかろうと母屋の一室を使うことを許可ししばらくの間家族同様の生活が続くようになった。

そういえば秋子は出産後の経過もよく早々に床上げとなったが、当然のことながら赤子の世話が主となり、父助左衛門の仕事を手伝うことは叶わないため奈美と共に静香が手伝うことになったが、静香は診療所の手伝いもあったし弥三郎の代わりだとして佐助による忍びの動きを学ぶなど忙しいときが続いた。
見かねた春貞と幸江の娘である理子がその穴埋めにと手伝いを申し出て許されたのだった。

それから四日後、井之上新界が描いた緻密な義歯の図面が留吉に渡された。
留吉が義歯を試作することを知った春貞は小刀一本では役に立たないだろうと日本橋で細かな彫刻に相応しい刃物を探してこいと留吉に命じたこともあり、留吉は一日の大半を義歯を作ることに没頭していた。
「留吉さん。世辞でなく、あなたは仏師にもなれますよ。
まだ荒削りなのは承知ですが、これは長崎で試作して貰ったどの義歯より精緻です」
昼飯の為に診療所から出て来た井之上新界が眼をきらきらさせて呟いた。
留吉は義足とは違い、より精緻な造作をしなければならないからとまずはツゲの木片を左右からきつく押さえ固定する治具を工夫した。
今で言う万力のようなものだが、片手で押さえたり膝で固定したのではどうしてもやりにくいと自分なりに工夫していた。
「井之上先生、この上顎に当たる部分は薄いほど良いのでしょうな」

留吉が問うと新界は、
「そうです。そこは床と呼んでおりますが、薄い方が着けたときの違和感が薄れます。
しかし薄すぎると強度が心配ですね」
と応じた。
「なるほど。
ともかく岩次郎親分に着けてもらって少しずつ手直しするしか手はございませんな」
入れ歯を削りながら留吉が呟き新界が頷いた。
「そういえば先生。義歯は昔からあったのですか」
「そうよなあ。歴史は古いようじゃ。のう井之上さんや」
笙船が新界に話を振った。
「はい。長崎で聞いたところによれば人の歴史と共に何らかの義歯の工夫があったようです」
「そうじゃろうよ。虫歯はもとよりじゃが、怪我で歯を失う事例はいつの時代でもあったはずじゃ。

そしてな、臼歯部…奥歯のことじゃがこれを失えば物を噛む能力が低下し五臓六腑に負担を掛けることから体力を消耗し早期に老化するというな」
「そうですね。また前歯の欠損では明瞭な喋りが出来なくなるばかりか容姿が確実に悪くなります。したがってこれらを何とかしようと義歯の歴史も大変古くからあったようですね」
「なるほど。失った歯を人工的に修復して咀嚼の回復を図るための義歯なんですな」
留吉が自分で荒削りしているツゲの入れ歯を見ながら呟いた。
笙船が、
「留吉さんや、先ほどお前さんが問うた床じゃがな…」
「はい」
「はめてみれば一目瞭然だがな、その床が義歯全体を支えるだけでなく装着感を増し、噛む力を支えるのじゃ」
「確かに。笙船先生の言われるとおりでして、耳学問ながら諸外国の義歯にはこの床がなく実用性に欠けると聞き及びました。
もっぱら見栄え重視で、食事をするときには外すといった例もあるようです」

新界が言い切った。
「親分の義歯も最初は一部とのお話しでしたが、結局この際にと全部を見直すことになったわけですね」
「そうじゃ。あのお人は自分の歯に感心がなかったのじゃろうが、殴られた結果、井之上先生の診断によると総入れ歯にせざるを得ないという結論になったのじゃよ」
「だけど先生方。この義歯を口に入れたとしてすぐに外れて物を噛むことなどできないのではありませんかな」
留吉が疑問を呈した。
「よき問いじゃ、留吉さん」
笙船は破顔しながら、
「岩次郎親分の義歯じゃが、一番難しいのはどこじゃったかな」
と逆に留吉に問うた。
「は、はい。上下の歯茎はもとよりですが床を…なんというのでしょうか、上下口内にあわせることです。
井之上先生のご指導の通り、口内に紅を塗り義歯を着け、紅が義歯に着く着かな

いを頼りに荒削りから少しずつ手直ししていますが、削りすぎると元に戻せませんので気を使いますな」
留吉が入れ歯を手に応えた。
「そうじゃろうとも。でな、口内にぴたりとあった形に床や歯を整えるわけじゃが、特に床はぴったり作れれば装着感をよくするのは勿論、唾液で吸い付くのじゃよ」
「本当ですかい先生」
「本当じゃとも。実用的な入れ歯を作れるのは仏師や宮大工たちだと言ったがな、例えば高い技術を持った者が板面をよく削った材をな二枚合わせるとな、吸い付いて離れないという…」
笙船の言に続いて新界が、
「その板面に水を含ませるとさらに強い吸着が得られるんです。入れ歯が吸着する理屈もこれと同様だと思います」
と説明した。
「なるほど。要は精緻なものを作らなければならないわけですな。こりゃあ大変だ」

留吉がため息をついた。

第六章　夫婦（めおと）医者

一

春貞は小川笙船の言を聞き、しばらく放っておこうかと考えたものの井之上新界とおよしの思いが本物なら全面的に後押しをしてあげたいと思うようになった。ただしそれにはまず本人達から本心を聞かねばならないと診療所から戻ってきた二人を自分の部屋に呼んだ。

その場にはやっと退所間近になった岡っ引き岩次郎の姿があった。

「旦那、またまた若い者たちへのお節介ですかい」

出された茶を美味そうに飲みながら問うた。

「まあそんなところだ。

上手く収まるところに収まれば親分、またお前さんに仲人が回っていくかも知れ

ないぜ」
春貞の冗談に、
「任せてくださいまし。
留吉さんの時からすでに五組の仲人を務めましたからな」
岩五郎も笑いながら応じた。
その場に呼ばれた二人も薄々どのようなことで呼ばれたかは心得ていたようだが、さすがに二人一緒に春貞の前に座すのは初めてなので緊張していた。
「まずは座ってくれ」
春貞は磊落に語りかけた。
そのとき奈美が声をかけた。
「春貞さま。お客様でございます」
「うむ…」
「小田原のいのうえさまと申しておりますが老齢のご夫婦です」
奈美がそう報告した。
すると井之上新界が、
「も、もしかすると私の両親かも知れません」

と慌てだした。
「そうか、ともかく客間にご案内してくれ」
春貞は機嫌良く言った。
岩五郎は、
「あっしは失礼し部屋に戻っておりやす」
と頭を下げ、少し足を引きずりながら席を外した。
しばらくして春貞が客間に入ると品の良い老夫婦が平伏した。
男の方は年寄りにしては上背もありがっしりした体格だった。
「いのうえさんとやら、頭を上げてくれ。ここはそんなに堅苦しい場所ではないでな。
俺が松平春貞だが…」
と二人の前に座しながら言った。
「はじめてお目にかかります。
手前、品川で東海屋という廻船問屋を商っております井之上義和と妻の多恵と申します。
ご挨拶が遅れご無礼続きでございますが、息子新界が大変お世話になっておりま

す」
平伏を解かずに挨拶した。
「やはりそうでしたか。
ちょうどよいところです。いま二人と、いや申し上げて良いのか。
井之上先生が嫁にしたいという女と共に話しを進めようとしていたところだ」
春貞がそういうと、
「それはご面倒ご厄介をおかけしているようで申し訳ございません。
手前どもが遅ればせながら江戸に出できたのはその事でございまして、これまで
何度も文が届き、息子の考えは承知しておりましたがこればかりは直接顔を見て
話しを聞きたいと思いましてな」
一息入れた井之上義和は、
「そうそう、これは品川名産の心ばかりの土産のつもりです。
先の野分けの影響で些かできが悪うございますが海産物の干し物でございますの
でご笑納くだされ」
と風呂敷包みを差し出した。
「これはありがたい。

遠慮無くいただきましょう。
ところでその野分けで被害はありませんでしたかな」
春貞が問うと、
「店は一階が水に浸かる程度でございましたが、舟が一艘流され破損させてしまいましたので苦慮しております。
しかしこの度の野分けは特別難儀なものでしたから、店の者全員が無事であっただけ幸いでした」
井之上義和がそう答えた。
そのとき、
「失礼いたします」
と幸江と亜耶が茶を運んで来たが、その後ろに小川笙船に連れられた新界とおよしが緊張気味に入ってきた。
「さあさあ、そんな仏頂面してねえで早く座ってご両親に挨拶しろ。わざわざ小田原からお主達の顔を見に来られたんだ」
春貞が笑いながら言った。
春貞と隣に座した幸江に頭を下げた新界が両親に向かい合い、

「おとっつあん、おっかさん。連絡をくれれば迎えに出たものを」
と苦虫を潰したような顔をした。
「お前の文だけでは要領が得ませぬ。
また出向くと知らせればなんだかんだと用事を言い出して日にちばかりが経ってしまいます。
それに是非是非遅ればせながらお世話になっている松平春貞さまと幸江さま、そして小川笙船先生にご挨拶をと思いましてな。
いや、それと共にお前が嫁に決めたという女子にもお目にかかりたかったのです」
父親がいうとおよしが突然顔を伏せたがその痩せた肩が震えていた。
「おとっつあん、おっかさん。
こちらが小川笙船先生です。
そしておよしさんです」
新界が狼狽しながらも紹介すると井之上義和は笙船に体を向け、
「新界の父井之上義和でございます。
そして妻多恵です。

お噂は息子から多々聞いておりましたが、ご厄介をおかけし申し訳ございません」
と多恵共々頭を下げた。
「これはご丁寧に。
小川笙船でござる。
厄介どころか井之上先生のおかげで当診療所はより開かれた医療の現場となりましたし、戦力として無くてはならないお人でございますぞ」
笙船は言い切った。
笙船にあらためて頭を下げた井之上義和がおよしに向き直り、
「あなたさまがおよしさんでしたか。
新界の父でございます」
と頭を下げたのでおよしはどうしてよいかわからずただただ縮こまってしまった。
「おとっつあん。そうそう事を急いてくれますな。
およしさんに私は確かに求婚しましたが、まだ返事をもらっていないのですから」

新界がおよしと春貞に視線を向けながら申し訳なさそうに、
「およしさん、すまない」
と謝った。
およしは頭を左右に振りながらも黙っている。
春貞が場を白けさせないように口を出そうとしたとき、井之上義和が、
「およしさん。
私の話を聞いていただけますかな。
貴方様に話しを聞いていただくため我々夫婦は品川から参ったのです」
と願うと思わずおよしはコクンと頷いた。

「およしさん。我が家の商売は廻船問屋です。
廻船問屋とはどのような商売かご存じでしょうかな。
一言でいうなら大型の船を持ち、様々な物資輸送を業としております。また輸送だけでなく物資を届けた先で別の物資を買い付けてくるという直接の売買をも生業としております」
義和が何を言い出すのかと春貞や幸江も神妙にしていた。

「船を扱う、船に乗る者たちは海や船に熟知していなければならないと同時に物資を取り扱いますので皆力持ちで体も大きな者が多ございます」
前に置かれた茶で喉を潤した義和は話しを続けた。
「そんな男たちのほとんどは世間様の眼から見ますと皆荒くれ男でございましてな。
なにしろ一度船に乗ったら命は船に預けなければなりませぬ。
したがって自然に…といえば聞こえがよいですが飲み・打つ・買うの生き様になる者がほとんどでございますし、手前も今は歳を取りまして些か静かに暮らしておりますが若い頃はどうしようもない遊び人でございました」
春貞は義和がどのような話しの運びをするのか、先が分かってきたように思えた。
「実は隣にいる女房多恵は品川のさるお武家さまの娘でしてな。
私と一緒になる際にはそれはそれは大変な反対をされただけでなく東海屋…私共船問屋の屋号でございますがな、と武家屋敷との間で血が流れるのではないかと危惧されるほど地元では大騒ぎとなりました。
いや、話しとは私と女房のことではございません」

義和は膝を乗り出すようにあらためておよしと向かいあった。
「およしさま。聞けば貴方様は吉原にいたことで息子の嫁になる事を躊躇なされていると聞きました」
思わずおよしが赤い眼をしながら義和を見た。
「新界が承知したとしても私共親や親戚筋が理解をするはずがないと思われているのではございますまいか。
実はな、新界も知らないことだと思いますが、手前の母は品川で知られた遊女でございました…」
義和が言い放った。
一同が驚きあらためて義和を注視した。
「私の親父は曲がったことが大嫌いな男ではありますが先に申しましたとおり、まあ廻船問屋の若旦那です。
そんな親父が女房にと選んだのは品川一の遊女だったのでございますよ。
『一緒になれないなら御店に火を点けて心中してやる』と父は言い放ったそうですが、結局爺様のよき判断で夫婦になることができました。
したがって、私にも当然のことながら母の血、遊女の血が流れておるのです」

その場の誰もが話しの展開に驚き、声を出す者はいなかった。
「母は齢七十五になりました。些か耳が遠い他は今も元気でございますし子供心にも綺麗な女でした。
およしさん、おわかりですな。
吉原にいたという事実を隠すことも、また卑下するなどということも手前どもには決して必要ございません。
私共夫婦がこうしてお節介ながらお屋敷に伺ったのはその母の命でもあるのです。
息子が心を寄せ妻にしたいと願うおよしさんはきっと素晴らしい女子であるに違いございませぬからお前が…私のことですがな。お前が説得してこいと言われてましてな。
私共からもお願いいたします。
是非息子の願いを聞き届けてはくれませぬか」
義和は膝を進めておよしの手を両手で包むと妻の多恵も同じく手を重ねた。
「いまどき滅多にないよい話しよのう」
小川笙船が静かに呟くと、

「わあああ」
およしが多恵の膝に突っ伏して泣き始めた。
その背を優しく撫でながら多恵は、
「およしさん。
ご承知の通り新界は二男坊、だからこそ夫は好きなことで身を立てろと長崎への遊学も快諾しました。
新界と夫婦になっても廻船問屋に縛るつもりは毛頭ございません。
二人で力を合わせ、皆様のご支援をいただきながらお医師の道を歩むのに我らは賛成こそしろ反対するものではございませぬ。
どうか、新界の嫁になってはくださいませぬか」
と願った。

そのとき、襖の向こうで、
「失礼いたします。春貞さま。膳の支度ができましてございます」
と静香の声がした。
「おお、ご苦労。運んでくれ」

と言いつつ、
「ではご一同。話しの続きはまた後にしてまずは一緒に膳を囲みましょうぞ」
春貞が機嫌良く言った。
四半時の後、客間にはずらりと膳が並び主賓の席には井之上義和と多恵が、その隣に新界とおよしが座していた。
新界は、
「春貞さま。これではまるで婚礼の席順みたいではございませんか」
と恐縮し小川笙船が声高らかに笑った。
「義和さま。夜も更けてまいりました。
今夜は是非当屋敷にお泊まりになり、ゆるりと膳を囲んでくださいませ」
幸江がそう願った。
「春貞さま、そしてご一同さま。
急に伺いましたのにこのような暖かいお持てなしをいただき心より御礼申し上げます。
今後共に息子のこと、よろしくお願いいたします」
義和と多恵が深々と頭を下げた。

二

一同の緊張がやっと解けた頃、佐吉が慌てて飛び込んで来た。
「なにごとぞ」
そう問うた春貞の耳に佐吉は、
「う、上様が…」
「な、なんと！」
急ぎ玄関に向かおうと立ち上がった春貞だったが、すでに八代将軍吉宗が笑顔で客間の入り口に立っていた。
そしてその後ろには寺社奉行、大岡忠相がニコニコしながら控えていた。
「憩いの席に済まぬが、余も時間がなくてな。
鷹狩りが少々遅れたでその帰りに寄らせてもろうた。許せ」
「はっ、恐れ入り奉ります」
春貞をはじめ屋敷の者たちが平伏したのを見て状況が分からない井之上新界の両親も慌てて平伏した。

「う、上様。そして大岡様。ともかくもこちらへ」
静香に目配せしながら春貞は上座に席を設けて吉宗と大岡を誘い、静香は春貞の意を汲み急遽膳を追加するために台所へと走った。
「春貞。弥三郎のこと礼を申す。
まずは線香をあげさせてくれぬか」
吉宗の願いで春貞は早速仏間に吉宗らを誘った。
弥三郎の位牌に線香を手向け、手を合わせた吉宗は、
「弥三郎ほどの御庭番は今後も出ないであろうが奴もそちと出会い、本当の生き甲斐を見いだしたようじゃ。
幸せな男ぞ。
今後は佐吉をな、よろしく頼む」
そう言いながら大岡と共に客間に戻った。
一同を見回しながらどかっと座した吉宗は膳を見渡し、
「何の祝いぞ」
と問うた。
「はっ。小川笙船先生と共に向島診療所を運営してくれております井之上先生の

嫁御が決まりそうでございましてな…」
「ほう。嫁御が決まったから祝いというのは分かるが、決まりそう…でそちの屋敷では祝い膳を囲むか」
隣で大岡が笑っている。
「ここに至るもいろいろとございまして。
また今日はその、井之上先生のご両親に初めて来訪いただきましたので歓迎の意を含んでおります」
春貞が言うと、
「なるほど。そこなる夫婦が両親か、かまわぬ面を上げよ。許す」
吉宗に直接言葉を掛けられ震えが止まらぬ二人は頭を上げられずにさらに平伏した。
「確か医師は長崎で阿蘭陀医学を修行したとか」
「ははっ」
そのとき、
「Wat is jouw naam?」
いきなり吉宗が耳慣れない言葉を発した。

一瞬誰もが何ごとかと沈黙した瞬間、
「Mijn naam is Inoue Shinkai.」
と新界が平伏しながらも言葉を返した。
「Nagasaki was welk jaar?」
「Twee jaar.」
「ふむ、よう勉強しているではないか。褒めて使わす。より励め」
吉宗は手を叩いた。
「上様。いまのお言葉は」
春貞が問うと、
「なに、思いつきでな、阿蘭陀の言葉で井之上医師の名前を聞き、そして長崎に何年いたかを問うたのじゃ」
吉宗は笑いながら言った。
「お、驚きました」
春貞や笙船はともかく、一同なにが起こったのかがわからず頭を下げるしかなかった。
吉宗と大岡の前に膳が並べられると、

「座を壊してしまい済まぬ。
相変わらずゆっくりとはしておられぬが折角の持て成し、箸をつけさせてもらうぞ。
皆も一緒に食そうぞ」
そう言いながら吉宗が両手を合わせてから食べ始めた。
「上様。お鷹狩りと申されましたが、それにしては時間が些か遅うはございませぬか」
春貞の問いに、
「うむ。鷹狩りと言うてはおるが、実のところ先の水害の被害を己の眼で見ようとな、馬を走らせたのじゃ。
忠相を同道させたのもそれが狙いじゃ。
忠相より江戸の町を知り尽くしている者は他におらんでな。
まあまあそうとでもしないと余はなかなか城の外に出れんのじゃ」
吉宗は自虐的な笑いを浮かべながら続けた。
「今回の野分けは未曾有の大災害となってしまったが、問題はなにも片付いておらぬ。

取り急ぎは被害が少なかった西国大名たちに手伝い普請を命じたが、これから季節は冬場に入る。
普請そのものも過酷なものとなるだろうが、余が弱音を吐くわけにはいかぬのだ。細かなことは幕閣らに任せるしかないが、少しでも惨状をこの肌に感じ、脳裏に焼き付けなければ難儀している者達に申し訳がたたん」
「御意」
「そういえば春貞。政五郎に聞いたが、お主は江戸の復興の一助にと千二百両もの大金を政五郎に託したようじゃな」
「はい。しかし上様、それがしの懐から出た金ではございませぬ」
春貞が応えると吉宗は無言で頷き続きを促した。
春貞は九月末頃より五藩の重臣が手伝い普請を逃れたいと屋敷に陳情に来たこと。幕閣に物申すことができるのではとの希望から腹を切る覚悟で金を差し出した武士(もののふ)たちだけに無下に押し戻すことができず受け取った金であることを正直に述べ、
「お叱りであれば甘んじてお受けいたします」

と平伏した。
意外にも吉宗は機嫌良く、
「よいよい。外様大名にとっても生き死ぬの問題であることは余も承知しておるのだ。しかしな、これだけの大災害を幕府の負担でというわけにはいかぬのじゃ。
それにしても春貞、そちから手伝い普請に関しての陳情は一度もなかったはずだがな」
と悪戯っぽく笑った。
「御意。それがしなどが口を出せる問題ではございませぬが、せめてその金を江戸の町の復興の一助にできればと預かったつもりでした」
春貞は平伏したまま応えた。
「お主らしいよのう。しかし幕府はいま千両の金も簡単には出せぬ。お主の金、政五郎と図り有益に使ってくれ」
吉宗が言い切った。
四半時ほどの短い時間だったが吉宗は機嫌良く膳を囲み、茶を飲んでそそくさと立ち上がった。

「春貞。皆の者、邪魔をした」
そう言いながら客間から一歩出た吉宗がふと振り返りながら、
「井之上新界の嫁の名は何といったか」
と問うた。
「およしにございます」
幸江が答えると、
「新界、およし。幸せになれ」
そう言いながら吉宗は風のように去って行った。
その吉宗を追うように背を向けた大岡に小川笙船が声をかけた。
「……」
「大岡さま、例の持病のお薬です。すでに以前のは使い切っておられるのではないかと思い先ほど急遽ご用意いたしました」
「これはありがたい。して代金はいかほどか」
大岡の破顔した顔を眺めながら笙船は、
「過日いただいた中に含んでおりますのでご懸念無く」
とわざとらしく小さな声で答えると大岡は嬉しそうに頷いた。

門前まで送りに出た春貞、幸江そして笙船らが客間に戻ると一同がまだ呆然としていた。
すでに箱膳は片付けられてそれぞれの座す前には茶と茶菓子が置かれていた。
「およし。済まぬ事をした。
お前の気持ちを斟酌する前にあのような仕儀となってしまったこと、済まぬ」
春貞は座りながら言い切った。
それまで一言も喋らなかったおよしだったが、どこか吹っ切れたようで、
「とんでもございません。わたくしごときに公方さまが直接お言葉をかけてくださるなど今でも信じられません。
また井之上先生のご両親にも思いもよらぬ温かいお言葉をいただきこんなに嬉しいことはございません。
これすべて春貞さまのおかげでございます」
と神妙に頭を下げた。
「そうか。それならよい。
ただし結論は急ぐことはない。

俺たちは心からお前の幸せを願っておる。
井之上先生と十分に話し合い、納得いく結果を出せばよい」
春貞がそういうと新界と両親もがくがくと頷いたが部屋の隅でおよしの兄留吉が嗚咽していた。
その夜、井之上義和と妻多恵は屋敷に泊まることになった。

三

しかし向島診療所は翌朝も早くから患者が並び始めた。
多くの人たちはまだまだ水害から立ち直れていなかったし劣悪な環境で毎日を過ごさなければならないからだ。
腹を下す者、皮膚病や眼病が多かったものの咳や熱で担ぎ込まれる乳幼児も目立った。
また食べ物の確保もままならない人たちも多く栄養失調のため様々な病気を引き

起こしてもいた。
そうしたことを配慮し、診察部屋の隅にはいつもよりかなり量が多い甘藷が積まれていた。
「富さんや、御子になあの芋で粥を作って食べさせておやり。
うむ、今回は特別じゃ三本持っていってよいぞ」
小川笙船も子供が腹を空かしている姿にはどうしても甘くなり、母親に声をかけていた。
一端診療所に入れば井之上新界もおよしも一人の医者として患者に接することに専念していた。
幸江に導かれ、診療所の居間からそっと笙船や新界、そしておよしの奮闘ぶりを覗いていた井之上義和と多恵は「ふっ」と小さな吐息をもらした。
「いかがされましたか」
幸江に問われた義和は、
「手前も何度か医者にかかったことがございますがこちらの診療所は患者への扱いが丁寧で優しく、それでいてお金を取らないというのですからもう驚くしかございません。

それに息子の立ち振る舞いをこうして覗かせていただきましたが若奥さま。お陰様にて安心いたしました。
親が申すのも僭越不遜でございましょうが新界もまことに医者らしく働いておるのを見て嬉しく安堵いたしました。
はじめ、医者になりたい等と言い出したときにはどうなることかと心配したものでございますが、ありがたいことでございます」
義和は思わず両手を合わせた。そして、
「若奥さま。我ら夫婦はこのまま戻ることにいたします。
息子の姿は勿論、嫁となるであろうお方にも身近に接し安堵いたしました。
後は息子の努力と誠意あるのみ…。
とはいえ世間知らずの若造。どうぞどうぞ、今後共にご指導ご叱咤くださいますようお願い申します。
大変お世話になりました」
井之上義和は深々と頭を下げた。
母屋から出て来た春貞と共に幸江は二人を門前まで送ろうとしたが義和は、

「いや、我らの我が儘ですがどうかこのままお別れさせてください。
あまりに居心地のよいお屋敷にて、またまた甘えが出てしまいそうでございますのでな」
井之上義和と多恵は再び丁寧に頭を下げて背を向けたがそこにはいつのまにか佐吉がいて、
「あっしが舟でお送りいたしましょう」
と誘った。
「頼んだぞ」
春貞が命じた。

その日の診療所の最後の患者は岡っ引きの岩次郎だった。
「およし、一般の診療もめどがついた。
岩次郎親分を呼んでもらえぬか」
小川笙船がおよしに願った。
およしが母屋に岩次郎を呼びに行ったが岩次郎は部屋にはいなかった。
母屋を出てあたりを一回り見回すと門前で岩次郎が箒を持って掃き掃除をしてい

た。
「親分さん、そんなことして大事ありませぬか。足腰はやっと治ってきたところなのですよ」
およしが心配して問うと、
「いや、この程度のことでもしないと申し訳なくてな。それに気分転換にもなるわい、およしさん」
岩次郎は破顔した。
「笙船先生がお呼びです。義歯がほぼ出来上がったようです。
さあ、箒はわたしがお預かりしますので診療所に行かれてください」
およしの言に頷きながら岩次郎は体を揺らしながらも診療所に向かった。

岩次郎の傷は勿論体調も改善したが時間がかかっていたのは義歯の調整だった。
「親分、今日でほぼ調整は終わりになると思います。後どうしても違和感があったらお手数でもお通いいただけませぬか。
親分を義歯のためだけにここに留め置くのもお役目に支障が出ますし師走に入りましたからお宅で新玉の年をお迎えしたいでしょうし…」

井之上新界がいうと、
「おかげさまで物を噛むことが出来るようになったし足腰にまだ不自由な点はありやすが痛みはほぼ取れました。
これで宅に戻ることができます。
先生方、この通りだ。
ありがとうございました」
岩次郎は診察部屋の畳に両手をついて小川笙船と井之上新界に深々と頭を下げた。
「いやいや、義歯に関しては留吉さんの功が大きいでな。我らは理屈を述べただけで削ったのは留吉さんだ。
わしが言うのも変だが留吉さんの技工がなければこれだけ精密な入れ歯はできぬでな」
笙船がいうとそれまで静かに聞いていた留吉が、
「なにしろ須田町の親分は我ら夫婦の仲人ですからな。いい加減な細工はできませなんだ」
と笑った。

岩次郎は留吉に軽く頭を下げながら真顔になった。
「笙船先生。お許しが出たので明日にでも宅に戻ろうと思いますがな、長い間の滞在と心のこもった治療、そしてこの義歯のお礼はいかほど支払ったらよろしいでしょうかな」
と問うた。
思いもかけなかった問いに笙船も、
「うーむ、どうしたものかのう」
と赤毛に白い物が多くなった髭を引っ張りながら笙船が首を傾げると岩次郎は、
「先生方、あっしは施しを受けるような男ではございませんや。
ご承知のように二足のわらじを履きいまでも金貸しも商ってそれなりに小金もございやす。
千両箱を持ってこいと言われても無理ですが、このご恩は形にしないと今後は先生方は勿論ですが春貞の旦那の顔をまともに見られませんや。
春貞の旦那にお聞きしたら診療所の診察代はすべて笙船先生にお任せしているから先生にお聞きしろと言われまして…。
是非治療費を払わせてくださいやし」

と再び頭を下げた。
「わかった。
それでは親分、入居の費用が一両、そしてな義歯の費用が一両と全部で二両いただこうかのう」
笙船がいうと、
「承知いたしました。
文を出したので明日女房と子分共が迎えに来ますのでお支払いさせていただきます」
岩次郎がさっぱりした顔で言い切った。
その夜は幸江の心遣いで岩次郎退所の祝いをと富四郎が略式ながら祝い膳を用意した。
かつてゲジゲジの岩次郎と近隣で忌みきらわれた男が終始泣きっぱなしだった。
「おいおい、今夜は親分退所の祝いの場だ。涙は似合わないぜ」
苦笑しながら春貞は言ったものの岩次郎の隣に座した留吉が肩を組みながら嗚咽していた。
「まったく泣き虫が増えたな」

そう呟きながらも春貞は満足そうに微笑んでいた。

翌日の巳の刻過ぎ、岩次郎の女房梅と手下が五人、町籠と共に現れた。
梅は菓子折だという紫の絞り染めの風呂敷を笙船の前に差し出し、
「両先生、まことに親身にお世話を頂きこのとおりお礼申し上げます」
と深々と頭を下げ、
「これは入所および治療費でございます」
と奉書に包まれた小判を置いた。
「これは恐縮」
小川笙船が包みに手を伸ばすと同時に顔を上げ、
「親分さん、これは過日申し上げた費用よりかなり過分でございますな」
というと。
「先生。十両包ませていただきやした。
あれだけお世話いただきかつそこいらでは入手できない入れ歯まで作っていただいての二両など誰が聞いても安すぎます。
聞けばこちらの診療所は払えない者からは取らず払える者からはいただく…とい

うのが主旨だとか。だとすればわっしがお支払いできる精々の額でなければ気が済みませんや。
お陰様で新玉の年からまたお役目に精進できます。
十両は確かにわっしにとって大金ですが先生方はそれ以上のことをしてくださった。江戸っ子の心意気と思し召してお受け取りください」
岩次郎と梅は頭を下げた。
「承知した。それではありがたく頂戴しよう。
およし、これをな親分からだと田宮さんに渡してくだされ」
笙船の嬉しそうな声が診療所に響いた。

四

後十日あまりで大晦日となった午後、遅い昼餉を済ませたおよしが居間に寝転んでいた春貞に、

「春貞さま。お話しがあるのですがいまよろしいでしょうか」
と声をかけた。
「おう、入ってくれ」
笑顔で春貞が応えると座敷に座ったおよしが両手を畳につけて深々と頭を下げた。
「おいおい、何の真似だ。手を上げてくれ」
磊落に春貞が話しかけると、
「いろいろとご心配をおかけいたしましたが、井之上先生と所帯を持つ決心をいたしました」
と春貞を直視して言い切った。
「うむ。それは目出度いし嬉しいことだがおよし、俺たちの勇み足があったからと無理矢理己を言い聞かせているのではあるまいな」
「それはございません。
どう考えても井之上先生と私とでは釣り合いがとれず、先生の足手まといになるのではないかと心配しておりました」
「ふうむ」

「北国にいたというだけではございません。
私の方が年上でございますしご承知のように家事もろくにできない女でございます。また先生は長崎に遊学され、新しい阿蘭陀医学と漢方や本道のよきところを取り入れようと日夜勉学に勤しんでおります。
それにくらべて私は…私は何も知りません」
「だから釣り合わないと思ったのかい」
優しく春貞が問うた。
「はい」
「しかしな、およし。井之上先生が新しい時代の医療に必要な人材で優秀な男だということには俺も異存はねえ。
その優秀な男が嫁にと選んだのがおよし、お前だということを忘れちゃあいけないぜ。
お前は何もできないというが笙船先生たちの診療所の女医者として患者達に信頼され、そしてな、実績を積み重ねているではないか。
井之上新界という秀才が選んだのがおよしなのだ。自慢してもよいのではないかな、およし」

顔を上げたおよしは春貞が吉原から身請けしたときのおよしではなかった。強い意志を持って病人や怪我人を助けたいという心意気に満ち満ちていた。

「それで井之上先生と一緒になる決心がついたのかい」

春貞が優しく問いかけると、

「はい。これからどういうことになるのか見当もつきませんが、あの診療所で笙船先生と井之上先生と共に治療を続けさせていただきたいと思います。多々ご厄介をおかけすると思いますが婚儀の件お許しいただけましょうか」

春貞は思わず手を叩いていた。

「嬉しい話しだ。なにも心配することはない。俺たちに任せてくれればそれでよい。皆お前たちの味方ぞ。年が明け、よい季節になったら二人の結婚式を挙げようじゃあないか」

春貞は上機嫌で言い切った。

その日の夕餉が済んだ後、居間に井之上新界とおよしが一緒に春貞、幸江の前にいた。また小川笙船と田宮助左衛門も一緒だった。

「ということでな、助左衛門。済まぬが年明けのよい時期を見て二人の式を挙げられるよう取り仕切ってくれ」
「承知いたしました。まずはご両親にお知らせすべきと思いますがな」
助左衛門も笑顔で応じた。
「そうそう。であれば助左衛門、お主たちの離れの隣にでも二人の住居を考えてくれ」
春貞が命じた。

茶をひと飲みした小川笙船は真顔になって、
「井之上さんや。お主たちの婚姻は我ら全員が願っていたことじゃ。これほど嬉しいことはないがひとつ確認しておきたいことがあるのじゃ」
と切り出した。
「春さんや若奥さまの前じゃがな、井之上さんはいつまでこの診療所におるつもりなのじゃ」
湯飲みから口を外した笙船が問うた。
「……」

「よいか、間違わずに聞いて欲しい。
二人がもしどこかで開業したいということであればこの向島診療所は大幅に規模を縮小するか看板を下ろさなければなるまい。
わしも歳じゃからそうそう一人で長くは続けられぬじゃろうからな。
いや、だからと言って決して足止めするつもりはないのじゃ。
何ごとにも始まりがあれば終わりがある。お主たちが新しい土地で活躍したいということならわしは喜んで送り出そうと思っておる。
反対に…ここにいては名を上げることは出来ぬだろうし流行医者となって千両箱を抱える身分にもなれまい。
どうじゃな、一緒になってからの二人の人生、話し合ってみたかのう」
笙船が穏やかに言うと春貞も頷いた。
井之上新界はおよしと視線を合わせてからおもむろに話し出した。
「本当に皆様にはご心配をおかけして申し訳ありません。
私の、いや私たちの願いはいつまでもこの向島診療所で診療を続けたいということです。
本当でございます。

恰好をつける訳ではございませんが私は金儲けに興味はございません。どうしても金が必要なら実家の稼業を放棄した私にも父は金を残してくれています。
多分開業でもするならその時に使えということだと思いますが、私はその金にも興味はございません。
その日その日をおよしさんと、そしてご一同さまと有意義に生きて行ければ満足でございます。
それに私は医者としてまだまだ一人前ではございませんし、これまで何らかの医療の成果をお認めいただけるとしてもそれはこの診療所の環境があり、かつ笙船先生がおられるからでございます」
新界は居住まいを正し春貞に体を向け、
「春貞さま。是非これからもおよしさんと共に、笙船先生に学びながら診療を続けたいと願っておりますがお許しいただけましょうか」
と頭を下げると、
「無論のことです。井之上先生。
我らから願わなければなりませぬが、すでにこの診療所も近隣の人たちにとって無くてはならぬ施設となり申した。

亡き沙代の母も草葉の陰で喜んでいると思う。
およしと一緒になってからも笙船先生をお助けいただければ嬉しい」
春貞が破顔して応えた。
「目出度い。夫婦医者の誕生じゃな」
小川笙船は潤んだ目で二人を見つめていた。
寛保二年の厳しい冬は始まったばかりだが、春貞の屋敷には暖かい心の通いが満ち満ちていた。

安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴスティーニ「週刊江戸　小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり　江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学　名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
菊池ひと美「お江戸の結婚」
森田健司「江戸の瓦版　庶民を熱狂させたメディアの正体」
江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
野火迅「使ってみたい　武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」

大森洋平「考証要集　秘伝！ＮＨＫ時代考証資料」
人文社「切絵図・現代図で歩く　江戸東京散歩」
立川博章「大江戸鳥瞰図」
柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書　付・新陰流兵法目録事」
柳生耕一平厳信「負けない奥義　柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」
村山知義「無刀の伝　柳生新陰流極意」
新人物往来社「剣の達人一一一人　データファイル」
人文社「江戸庶民の食風景　江戸の台所」
松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」
大野恵造「江戸小唄総覧」
江戸風土研究会「地図で読み解く江戸・東京」
NPO法人 宗春ロマン隊「徳川宗春伝」
深井雅海「江戸城御庭番―徳川将軍の耳と目」
若桜木虔「御庭番通史」
高埜利彦「日本の歴史（十三）元禄・享保の時代」
氏家幹人「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」

塩見鮮一郎「弾左衛門とその時代」
塩見鮮一郎「資料　浅草弾左衛門」
塩見鮮一郎「江戸の非人頭　車善七」
三谷一馬「江戸年中行事図聚」
永井義男「図説 吉原事典」
塩見鮮一郎「吉原という異界」
山崎光夫「薬で読み解く江戸の事件史」
梅原亮「江戸時代の医師修業　学問・学統・遊学」
貝原益軒（著）／伊藤友信（翻訳）「養生訓」
杉田玄白／酒井シズ(現代語訳)「解体新書」
片桐一男「杉田玄白　蘭学事始」
長尾剛「話し言葉で読める『蘭学事始』」
梅原亮「江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学」
歴史群像編集部・編「時代小説用語辞典」
大石慎三郎「大岡越前守忠相」
童門冬二「大岡忠相　江戸の改革力 吉宗とその時代」

羽生和子「江戸時代、漢方薬の歴史」
高崎哲郎「天、一切ヲ流ス―江戸期最大の寛保水害・西国大名による手伝い普請」
山口 正之「忍びと忍術」
山田雄司「忍者の教科書」
長谷川正康「江戸の入れ歯師たち― 木床義歯の物語―」
Wikipedia

あとがき

「首巻き春貞（十）戌（いぬ）の満水」をお届けする。
本巻はこれまでと違い、脱稿に四か月近くかかってしまった。
後に「戌の満水」と言われるようになった江戸期最大の寛保水害の実態を調べるのに時間がかかったという理由もあるが、余談ながら３Ｄプリンターと格闘する時間が多かったからでもある。
さて、先の台風二十一号や北海道における大地震をとってみても科学や技術が進歩した現代とはいえ自然の猛威はマンションの壁面や家屋の屋根をボール紙のように引き剥がし、橋を流し車でさえダンボール箱のようにひっくり返す。
それが木と紙でできていたといわれる江戸期の家屋や町となれば被害が桁違いに大きなことになるのは誰しもが想像できるだろう。
多くの人たちが死に、そして生き残った者たちはもとより、復興に心血を注いだ者たちも血を吐くような苦しみを味わうことになった。
ただし歴史を多少なりとも学んでいるとそのやり方はともかく、往時の権力者た

ちは現代日本で国政を預かっている者たちより格段に災害や不幸と真摯に真っ正面から取り組んでいたと思われる。
昨今の世の中を垣間見れば、言うまでも無く江戸時代と比べ科学技術は格段に進歩をしたものの国を治める者たちの意識や志は桁違いに地に落ちたと思わざるを得ない。
現代における我々の不幸は自然災害以上に政治家たちの自分本位、情のなさ、そして無知無能さに機縁するのではないだろうか。
さて、話しは小説に戻るが、長らく主人公春貞を支え軍師として活躍した公儀御庭番の弥三郎が亡くなった。
誰にせよ自分で生み出した人物を小説とは言え死に至らしめるのは気が進まないが世代交代も大切だし不老不死はあり得ない。
ともあれ第十巻も楽しんでいただければ嬉しい。

多摩市の自宅兼仕事部屋にて

九月九日　　松田 純一

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

首巻き春貞　　戌の満水（決定版）
松平春貞一代記（十）

2018年9月13日　　第一刷
2020年5月12日　　第二刷　（決定版）

著者：松田純一
http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン：Junichi Matsuda